

松陰の行った教育事実の一考察

吉田松陰の教育像 (その三)

吉村 忠 幸

一、信頼と期待からの予言

松陰はその晩年に至って教育の契機に愛があったことは既に述べた。そして教育にとつてはその愛よりも上位に信頼があることに気付いていたことも既に述べた。信頼は松陰にとつて、教育だけではなく、生涯を貫く信条でもあった。しかしその生涯の中で、他人に不信感をもったことが、安政五年末までに三度あり、他人を欺いたことが一度あった。これ以外の松陰の生涯は人から信頼され、人を信頼した日々であった。不信感をもったことの一つは東北遊についてすでに藩の許可を得ていながら、過書（通行手形）が手に入らなかった時であり、このため亡命という形になり遂に禄を失い土籍を削られてしまった。松陰はいう。「僕老吏の売る所となり、徒然の帰をなす。自ら愧ぢ自ら悔ゆ。固よりなり。然れども亦敢えて愧悔の言をなさず」（平三、嘉う・8・4）と。

二度目は野山獄時代に、ある誣妄によって点灯を禁じられた時のこととで、安政二年九月のことである。三度目は問部老中を要撃しようとして計画し、藩の重役周布政之助は松陰の友人でもあるから協力してもらえるものと信じて、計画実施のための援助を願い出でた時のことである。周布は一藩の危険を感じて、遂に松陰を敵囚する命を下した。三度とも松陰は自分は正しく善なる事をやるのだから、きつと他人も

賛成してくれるという人間信頼であった。一方松陰が欺いた相手は兄梅太郎である。東北亡命によって土籍を削られたが藩主の恩命によって十年の遊学を許可せられた二度目の江戸遊学の時である。下田から米艦に乗り込もうとしたが、兄に気付かれ阻止されるのを恐れて、次の念書を入れて兄を欺いたのである。「今甲寅の歳（一八三〇）より壬戌の歳（一八三二）まで天下国家の事を言はず、蘇秦張儀の術をなさず、退きては鱷魚となり、進みては天下を跋渉し、形勢を熟覽し、以て他年報国の基とせんのみ。富嶽崩ると雖も、刀水涸ると雖も、誓つてこの言に負むかざるなり。吉田寅二郎藤原矩方（血判）」（平三〇三、安元・3・4）と。富士山が崩れるとも利根川の水が涸れても、安政元年から十年間はこの誓は破らないといっている。だがこのあと下田踏海事件を起すのである。アメリカに渡って十年は帰って来ない覚悟であったのかも知れない。彼の伝記にも明らかなように、彼自身の天性もあつたろうが、両親との家庭関係に於てもつよい信頼関係にあつた。しかしその信頼に気付き、信頼のことばを使い始めるのは安政二年から三年にかけてであつて、講孟余話の中にそれが現われて来る。そして「余人を信ずるに失するとも、人を疑ふに失する事なからんことを欲す。況んや骨肉至親に於てをや」（二二五、安二・8・6）といっている。このあとにもいう。しかもそれは人を教導する時に大切であると念を押している。「先づ己の性を真に善と篤信し、良心の発見（現）、測隠羞

悪恭敬是非等を拡充し、或は物欲邪念起ることあれば、速に良心を尋ね来たり、其自ら安んじ、自ら快き所を求め、悔吝のなき如くすべし。人を教導するに於て亦然り」(二三七、安3・3・22)と。又言う。「往く者は追はず、然れどもその前日の善美を忘るる事なかれ。来る者は拒ばまず、又前日の過惡を記することなかれ」(二四六、安3・6・10)と。これらはいづれも松陰の人間信頼をあらわした言葉である。安政五年に入って時局が動き、松陰も志士の意見をもち始めるが、それを隠したり秘密にするようなことはない。それが却って誤解を生み、良策も用いられないことになる。もし志士の意見があり、活動するのであれば、秘かに梅田雲浜や梁川星巖に知らせるか、中山、近衛などの勤皇公卿に献策させる方がよいと江戸の久坂から忠告の手紙が来た。七月である。これに対して松陰は次のように返事している。「僕の策問散らばる由、頗る気の毒に存じ候兼ねて御存じの通り、人に遇ふも城府を設けざるの性質故、かくの如く成り行き候も自然の勢にて(中略)元来天下の事区々の人巧にて成敗するものにてはこれなく、殊に隠秘の事は却って人の疑慮を蒙り、宜しからず、只々公明正大十字街を白日に行き候如くにて、天命に叶はば成るべし、叶はざれば敗るべし」(六八四)と。松陰が志士として拙劣だといわれる一面である。しかし人間信頼という点からいえば、堂々たる発言でもあり、人間の誠心を信頼した発言といえよう。かつて久坂への作文評に「積誠これを蓄へよ」といった点と共通するものである。「天下は大物なり。一朝奮激のよく動かすところに非ず。それ唯積誠これを動かし、然る後動くあるのみ」(四八七、安5・7・11)といい、安政六年五月の江戸送りになった時、松陰は「至誠の実験」をするのだといって出発した。人間を信じ、人間の誠を信頼していたのである。教育における松陰の愛は門下生を全身をもって受け入れることになり、門下生からの信頼をもたらした。この信頼はまた松陰から門下生への信頼として返

され、門下生の将来への期待になる。松陰はその期待を自分の心の中に藏しておけずぐ文に表現して本人に、或はその周辺の人人にそれを伝えさせている。

吉田松陰が明治大正昭和の日本において、機会あるごとに浮びあがり、その伝記が出版されるということは、その生涯を貫いた誠実な生きざまや純粋な誠心の行動が人々の心を打つからである。教育の面からすれば門下生たちが松陰の理念を理念として、明治維新前に捨石になり、或は生き残って明治政府の中核になったということにあるだろう。しかもそれらの門下生が松陰の示唆した方向に生長しようとし、また大成して行ったものと考えられている。明治政府の中心になった人々もそれを公言し、他から言われてもそれを否定していない。だが松陰のどういう教育が、門下生にどのように生き働いているかについては明らかではない。教育の効果というものはいつでもそうしたものであるが、松陰の教育力によって多くの人材が輩出したと誰も信じ、そのように言われている。門下生の中でその伝記を書かれているものは多くない。それを見ても、松陰の教育とのつながりを明らかに書いているものはない。教育的研究ではこの点を明らかにしなくてはならない。松陰の行った教育事実を分析しなければわからない。私はこの点を松陰の門下生への信頼と期待、そこから生れる教育的予言といった面から、松陰全集の文献を中心に探ってみようと思う。論をすることよりも事実を探ってそれを跡づけようと思う。

この点でまず検討されねばならぬものは「松下村塾記」(三三三、安3・9・4)である。この文献はすでに前稿で分析したが、松陰の住む松本村こそ、萩を頭わすものであり、松下村塾こそ奇傑非常の人を輩出し、萩城を頭わすものだと言し、それが天下を動かすであろうと言した。歴史的には事実がそれを証明した。松陰がこれを書いたのは誠心誠意にあったが、それが技法にもあらわれ、実に気魄のこもった

文章である。この気魄は松下村塾に学ぶ者たちにとって、自分たちこそ、奇傑非常の人になりうるし、ならねばならぬような妖しい雰囲気と予言的な力があつたと考えられる。

門下生の個人に対して信頼と期待を口にし、文章に表現しはじめたのは、先にも見たように「愛」の発言が行われるようになった頃からである。松陰はそれによって教育的な予言にまで意識して発言していたかどうかについては明らかではないが、門下生のひとりひとりの個性面に眼が向き始め、それを好きだ、愛すべしと口に始めて送序・名字説・贈言に発展しその形式を保つようになったとみてよいであろう。門下生を他人に紹介する文でも、親展文書にはしないで、これが他人に読まれることを前提して書いていたようである。そしてたとい本人の欠点や弱点を明示しても、必ずや結論では本人の将来への教育的期待や予言をもって結んでいる。こうした教育の姿を松陰は原理化してはいない。私は些かでもその点にふれうるようその教育事実の考察ができれば幸だと思っている。

以下考察する人物については松陰全集第十巻にある「関係人物略伝」を歴史的事実とみ、それを要約しつつその人物の生涯とのかかわり方を教育事実と照合して、松陰の信頼と期待の教育的効果を明らかにしようと思う。

二、四天王といわれた人々

松陰の門下生を分類することはむずかしいが、これまで見て来た観点を明らかにするために、次のようにわけて考察しよう。

- (一) 松門の四天王といわれつつも、明治まで生き残りえなかった人々へ高杉晋作・久坂玄瑞・吉田無逸・入江杉蔵
- (二) 明治を前にして殉難していった人々へ松浦松洞・有吉熊次郎・作間忠三郎・玉木彦介・時山直八

(三) 明治に生き残り名をあげた人々へ伊藤博文・品川弥二郎・野村靖・天野清三郎・山県有朋

(四) 松陰の信頼と期待に沿ひえなかった人々へ増野徳民・岡部富太郎・福原又四郎・佐世八十郎・岡田耕作・岸田多門

これらの人々以外にも明治政府で活躍した人々もれば、消えていった人々もいる。しかし松陰とのかかわりの文献が少くは分析ができないので、上記の人々に限らざるをえなかった。

高杉晋作 (一八一七)

名は春風、字は暢夫、通称晋作、天保十年八月生る。藩士小忠太の長男、家禄一五〇石、幼時吉松淳三の私塾に学び、後明倫館に入る。安政四年十九才夏秋の間に松下村塾入門、久坂と共に村塾の双壁と呼ばれる。安政五年七月東遊、八月大橋順蔵の塾に学び、十一月昌平齋に入る。安政六年松陰江戸に送らるるやよく周旋し、かつ教をうけた。文久六年世子小姓役となり、文久二年には幕使に従い上海に渡る。この年十二月同志二十五名と共に御殿山英国公使館を焼く、文久三年松陰の遺骨を若林村に改葬、この頃より剃髪して東行と号す。文久三年五月の下関における外国艦船の砲撃に端を発し、人材として登用せられ、やがて奇兵隊を組織した。この後八月十八日の朝議一変による七卿落ちに反対する来島又兵衛らの上京行動を阻止せんとして高杉は敗れて亡命、このかどにより野山獄に投ぜらる。この間に禁門の変あり、久坂ら松門から多くの戦死者を出す。このあと幕府の第一回長州征伐に藩の恭順派の勢力を見て筑前に亡命した。後帰国して兵をあげ、恭順派を斃して藩論を統一した。薩長連合を実現し幕府の第二回長州征伐に事実上の総指揮者として連戦連勝した。この年慶応二年八月頃より肺結核が重り、下関にて遂に起てず、慶応三年四月十四日歿。享年二十九。明治二十四年正四位を贈られた。

高杉晋作が松陰の文に現われた最初は安政四年九月三日の「折煙管記」(三三〇)である。これは先に引用しているので、ここでは省くが要約すると、有隣らが土風を論じ、若い塾生たちが煙草をのんでいることが問題になり、次々と自分の覚悟をみせるために煙管を折った。

この中心人物は岸田多門であった。この時の前後の情況をしるした文を松陰は高杉にみせた。この時の高杉の言動を松陰は次のように示している。「高杉春風(晋作)余のためにいふ。『吾年十六にして便ち嘯煙を好む。長者これを規むるものありしも、而も従はざることをすでに三年なり。誤って再び煙具を路におとす。吾ここに於て感ずる所あり。断然割去せり。是れ小事なりと雖も顧へば亦難かりき。諸君の苦心は吾則ち之を忖る』と。春風行年十九、銳意激昂、学問最も勤む。その前途、余固より、料り易からざるなり」(三三三)と。高杉の人物がよく描かれている。

この頃高杉は夜になって塾に来てゐた。家人たちはその行動を疑い、宵から出ることを禁じていた。(三三九)その高杉は松陰について半年位で右の一件に見られるように他の人々よりも一步すぐれている所があった。翌安政五年二月十二日頃には松陰へ何か苦言を提供したらしい。松陰はこれを「ここを以て特に書して謝を言ふ。足下願くは棄てず、更に誨ふることあれ」(四一四)と高杉に感謝している。直言を素直にうけ入れている。この頃高杉は松陰に作文評を乞うている。これに対して、嘗つて久坂玄端や齋藤栄蔵の時とは異つて「覚えず巻を終る」(四一四)と、その出来栄を喜んでゐる。高杉を友人桂小五郎に紹介していう。「高杉晋作近日出府仕候。是は少年中の傑出に御座候、玄端の才、晋作の識とてつねに同友中にも賞し候事に御座候」(六五、安五・七・11)と。入門から約一年後の高杉評ということになる。本人に対しては次のように送叙している。「暢夫は有識の士なり。学問は蚤からず、又頗る意にまかせて自用の癖あり。余嘗つて玄端をあげて以て暢夫を抑ふ。暢夫心甚だ服せず。いくばくもなくして暢夫学業暴に長じ、議論益々卓し。同志皆ために柩を斂む。余事を議すること多く暢夫を引いてこれを断ず。其言往々にして易るべからず。是に於て玄端もまた尤もこれを推す。曰く暢夫の識や及ぶべから

ずと。暢夫反つて更に玄端の才を推して当世比なしとなす。二人惺然として相得たり。余或る時旁よりこれを賛けて曰く、玄端の才は諸を氣に原き、暢夫の識は諸を氣に発す。二人にして相得れば吾いづくんぞ憾あらんやと。(中略)暢夫玄端固より相得たり。暢夫の識を以て玄端の才をやる。氣みなそれ素あり。何をか為して成らざらんや。暢夫夫暢夫、天下固より才多し。然れども唯一の玄端を失ふべからず」(四一六、安五・七・18)と。高杉の欠点を指摘すると共にその後の指導の意図を明らかにし、行くべき方向を示す。底に流れるものは高杉への信頼であり、期待である。そしてその将来を予言している。「余獄に赴くの前二夕、桂小五郎至る。小五郎は僕無二の知己なり。話中左の問答あり。僕今叙してもつて足下(高杉)におくる。寅云ふ、暢夫は如何と。桂云ふ、俊邁の少年なり。惜しむらくは少しく頑質あり。後來その人言を容れざるを恐る。老兄何ぞ今に及んで言はざる、必ずや益あるなりと。寅云ふ、然り僕もまたこれを思ふ。但だ暢夫は十年の遊方を期す。僕心に書信を絶ちてその為す所に任かせんと期す。暢夫は後に必ず成すあるなり。今妄りにその頑質を矯めれば人とならず、暢夫は他年成るあり、仮令人言を容れずとも必ずやその言を棄てざらん。十年の後僕或は為すことあらば、必ずこれを暢夫に謀らん。必ずや吾に負かざらん」(六三三、安六・二・15前)と。

松陰の刑死後萩に帰つた高杉は、松陰を再入獄させた藩の役人の周布政之助に宛てて次のように言っている。「我が師松陰の首、遂に幕吏の手にかけ候の由、防長の恥辱口外仕り候も汗顔の至りに御座候。実に私共も師弟の交を結び候程の事故、仇を報い候はでは安心仕らず候(中略)唯日夜わが師の影を慕い、激嘆仕るのみに御座候。是よりは屈して益々盛んの語を学び、朝に撃劍、夕に読書、赤心を錬磨し筋骨を堅固にし、孝を父母に尽し、忠を君に奉じ候得ば、乃ち我が師の仇を討ち候本領にも相成り候らはんかと愚案仕り居り候(中略)萩中

共に謀るものなく、只々玄瑞と相対し豪談仕候のみに御座候（中略）明廿七日は吾師初命日故、松下塾に玄瑞と相会し、吾師の文章なりとも読み候らはんと約し候位の事に御座候」（六三三、安6・11・26）と。高杉は松陰の信頼と期待に応えることが自己実現の方向と知りかつ信じている様がよくわかる。このことはこれから後も変らなかつたようである。元治元年俗論党によって萩の野山獄に投ぜられた時、その「獄中日記」の六月七日の項に書いている事がある。晋作が獄中で読書していた時、同囚の者が、死生のわからない今、勉強などするのは意味がないと嘲った。高杉は江戸滞在中、獄中からの松陰の指導を思い出して次のように書いている。「汝妻を蓄へ吏となり父母の心に任かして可なり。もし官を君側に就くことを得れば則ち正論抗議し、惟だ道惟だ行へ。然らば則ち必ず貶黜恬退の人となるべし。而る後に書を読み心を練れば十年の後必ず大になすべきもの必ずあらん。今これをおひて猶ほ耳にあり。（中略）因りて憶ふに、予今日の幽囚先師の所謂貶黜恬退の時なり。あに勉強読書せざるべけんや、と。予言い了らざるに同囚笑ふ。（中略）余笑ひて答へず。即ち先師の言を壁に書いて自ら警しむ」（二〇四）と。松陰の死後五年目のことである。略伝にあるように高杉は不幸中道に斃れてしまった。松陰の教えに忠実であった彼だから松陰の教育的予言をきくと実現できたであろう。その実証を見ることのできないことはまことに残念である。

久坂玄瑞（二〇三）

名は通武、字は玄瑞又は実甫。江月斎とも号した。天保十一年に生る。父は藩医、幼時吉松淳三の私塾に学んだ。後明倫館に入り、医学所にも入って蘭学を学んだ。十四才の時母を、翌十五才の時兄と父を併せ喪う。家を継ぐ。家禄二十五石。村塾に入ったのは安政四年頃か。十八才の年の暮に松陰の妹文（十五才）と結婚し、杉家に同居した。安政五年江戸遊学の許可を得て江戸・京都に出で、志士と交わる。安政六年二月帰国し、藩の西洋学問所官費生となる。松陰の東送前後

種種奔走した。翌万延元年二月在萩の門人らと共に松陰の墓碑を作ると共に松陰の遺志を継いで塾舎に集会した。文久元年の公武周旋に反対したが成らず、松門の人々と「一灯銭申合」をし、勤王の心をみぎいた。文久二年高杉らと共に英国公使館を焼いた。文久三年八月十八日の朝議一変により長州藩は苦境に立った。玄瑞は政務役に挙げられ京都駐在を仰付けられた。その後元治元年六月、益田・福原・国司の三家老兵を率いて京都に上った。この時玄瑞、入江九一、寺島忠三郎らの松門の人々が軍議にあづかった。七月十九日禁門の変おこり、長州軍は敗れ、多くの死傷者を出した。玄瑞は寺島らと共に鷹司邸に於て自刃した。二十五才。明治二十四年正四位を贈られた。

久坂玄瑞は安政三年三月九州へ遊歴した時肥後で宮部鼎蔵に会い、始めて松陰の存在を知った。この旅のあと作文指導をうけた。これは既述したが、その頃は塾に来て直接指導をうけてはいなかったようである。しかし彼の評判をきいていたらしく、次のように「吉日録」（七六二）の安政四年三月二十七日の項に書いている。「このごろ一の感慨あり。聞く館中の諸生近日多くは怠惰なり。就中勉強する者二人を得たり。一は正亮（中倉）なり、一は斎藤栄蔵なり。二人並に庶子なり（中略）独り医学生半井春軒・久坂玄瑞年少本人にして苦学するのみ」（七六四）と。庶子とは長男ではない子の意味である。久坂の作文と松陰のその指導については既に述べた。こうした中で久坂の人物について次のように擲んで友人江幡に紹介している。「玄瑞行年十八、才あり気あり、駸々として進取す」（三三三、安4・11・20）と。この年の十二月に玄瑞は松陰の妹文と結婚し、杉家に同居した。この時久坂に贈言して言った。「久坂玄瑞は防長年少第一流の人物なり。固より亦天下の英才なり」（三三三）と。防長第一流の人物であると、どこでどのように認めたかは明らかではない。しかし前にも引用したように会った当初から「志気凡ならず」（三三三、安3・6・3）と認めていた。杉家に同居していることでもあり、松陰の指導をうけた事は考えられる。安政五年二月、久坂が江戸に出るに際して送叙している。「吾が妹婿

日下実甫は年未だ弱冠なり。志壯にして気は鋭し。これを運らすに才を以てす。吾嘗つて推すに吾藩少年第一流を以てす。(中略)余謂らく今天下は大変革の兆しあり。而して実甫は吾社の領袖なり。吾のこれに語るに寧ぞ尋常の言を以てせんや(中略)実甫の往くや皇京を過り江戸を観る。それ必ずや徧く天下の英雄豪傑倜儻の士を見ん。往いて与にこの義を討論し、以て諸を至当に帰し、返りて一国の公是を定むること誠に願ふところなり。若し然る能はざれば吾の推して少年第一流を以てする、一家の私言となる。天下の士に塊すべきや大なり(四三、安五・二・上)と。防長少年第一流と推し、それを実にする道を示し、必ずやそうなると期待し予言している。またそうなってもらわねば、防長第一流の少年と推したことが、松陰のひとりよがりになるから、松陰の期待に應えるように頑張れと励ましているわけである。多くの友人たちは玄瑞の東行を励し軽拳妄動するなといったらしい。然し松陰はその説に反対し「吾意は然らず、(中略)実甫誠に才気あり、誠に願借せず、然らば挙動を以て戒めとなし、思慮を以て教となす。願ふに機宜を失せざらん。実甫勉めよ、当今の世足らざるものは果断なり」(四三、安五・二・上)と追加している。

江戸へ出た久坂は久坂なりに勉強したらしい。この時村田蔵六に蘭学医学なども学んだらしい(四三)。松陰は久坂へ幾度も塾のこと門人のことについて手紙に書き送っている。同時に松陰の次第に激しくなっていく言論もつかんでいた。松陰が門下生や周囲の人々の時局への動きに絶望して絶食したのは安政六年一月廿四日であった。絶食を中止した二日後、松陰は入江杉蔵に宛てて門人たちを評して書き送った。これは何度も引用しているがこの中に久坂を評している。「実甫の才は縦横無礙、暢夫は陽頑、無逸は陰頑、皆人の駕馭を受けず、高等の人物なり。実甫は高ぶらざるに非ず、且つ切直人に逼り、度量亦窄し。然れども自ら人に愛せらる。潔烈の操これをやるに美才を以て

す。頑質なき故なり。之を要するに吾に於て良薬の利あり」(四三)と。二月の上旬に久坂は江戸から帰って来た。そして松陰の絶食のことも聞いたであろう。その原因の一つに自分も関わっていることを知った。それはこの前年十二月十一日付で義旗の一挙(四二)は時期尚早と高杉・飯田・尾寺・中谷と共に血判を捺して勧告した。これを松陰は受けとり、「江戸居の諸友久坂・中谷・高杉なども皆僕と所見違ふなり。その分れる所は僕は忠義をする積り諸友は功業をなす積り」(四六、安六・一・11)と怒っていることである。その松陰が久坂の人物を前述のように評価していた。このことも久坂は知ったに違いない。処が松陰は藩主が三月に参勤交代で江戸に上られることは違勅の將軍の下につくことであり、世子も在江戸であるために万一に密勅が下っても勤皇の兵をあげることも出来ず、また一方では他藩の志士たちに藩主を奪われ、勤皇にかつぎあげられる危険もあって、参勤交代を阻止しようと図った。入江、野村らにその阻止運動に働くことを求めた。長崎に勉強の命の下りた佐世にも働きかけた。入江も苦しんだし、佐世も迷った。これに対して久坂は松陰に苦言を呈した。「昨夜諸同志来り会し皆言ふ。云々の策の難、入江子遠憂憤鬱積、將に病を発せんとす。佐世八十も亦進退ここに谷まる。東すれば則ち君父に背き、西すれば則ち先生に違ふ。是において窮死せんと欲することしばしばなり。二子の志まことに悲しむべきなり。抑も為すべきの策あらば、死すべきの節あらば、則ち僕の軟弱なんじやくと雖も亦敢えて辞せざる所、何ぞ此を以てこの二子を責めん。先生の説に曰く、死は勇を傷つくと雖も苟免といづれぞや。功は成らずとも志の尚ぶに足るものあり。僕謂らく一人の生死固より論なきのみ。然れども国家の得失に係るに至らば則ち然るを得ざる者あり。今は僕無策を以て先生の策を沮む。先生僕を罵りて苟免となすは知るべきなり。然れども僕敢えて言はざるを得ず。先生願くは幸に再思せよ(中略)重ねて曰く、松洞

の帰るや先生大いに唾罵を加ふ、今やその反正を悦ぶの詩を作る。さきには無逸の心死を哭し又これを称するに清正の事を以てす。その人材を駕馭するの術巧みといふべし。然れども術の巧みなるは人却つて疑を容る。故に曰く巧詐は拙誠に若かずと。僕らを遇するにその誠にして巧まざるものを以てすべし。至願至願(六三三)と。いかにも久坂の言は松陰にとつて良薬である。人材を駕馭するの術の巧みといふべしときびしく批判し、却つてそれが疑をもたせるとまでいった。「巧詐は拙誠に若かず」とは松陰が日頃言っている内容である。これを久坂から言われたのである。松陰の心中は平静ではありえなかつたであらう。ここまで久坂は成長して来たのである。この久坂の書に次の一文を加えて某に与えている。某は恐らく入江であらう。「佐世の事小田村・久坂皆いふ。西すれば則ち師友に違ひ、東すれば君父に負くと。この説甚だ不満なり。君父に負かしむる師友、師友とすべけんや。人の師友に貴ぶ所は忠孝の大事を了せんとなり。佐世の心事実に右の通りならば、僕へ絶交さへすれば相済むことなり。若し忠孝の事に付疑あらば一面致したし。尤もこの事小田村・久坂には秘中の秘に致すべし」(六三三、安6・2・23頃) 松陰と久坂との心理的なトラブルはそう簡単に消えるものではあるまいが、久坂の言を良薬として反省しているであらうし、久坂への信頼と期待は變つていない。これより一ヵ月あとに次の一文が書かれている。「日下は防長年少第一流の才気ある男、今に至て僕肯てその品題を改めず、然れども一年の東遊氣挫け志消ゆ。故に今日に至るなれば僕その反正を望む念なき能はず。天下のためにこの一生の心死を惜しむなり」(六三六、安6・3・29)と。またいう。「久坂などあれ程の無情な男とは実に失望の至り、吾が情も少しは知てくれてもよかりそんなものに、粗暴とか権謀術数とか巧詐と云て高で人を相対にはせぬ」(六三六、安6・4・9)とまで松陰の心は平静ではなかつたが、久坂への品題を変えてはいなかつた。そう

したトラブルの中で久坂は獄へ出向いて松陰と話合つたのである(六三六)。その翌日には信頼している久坂に気嫌をなおし依頼している。「因て昨夜略々申し候様兄ら(久坂) 福原・作間・有吉など仰せ合せられ折々夜往て読書にてもしてやり玉へ」(六三六、安6・4・11)と若い福原らの指導を願つてをり、玄瑞もまた「高論を敢えて請はざるをえず」(四七〇)と四月二十八日「与二十一回先生書」の一書を書いた。松陰の信頼に応えようとしている。この中にいう。「さきに僕の東するや先生高叙を眺ふ、曰く今の世に当りて足らざる者は果断なりと、僕乃ち肝に銘じ骨に鑄りて以て知己の言を得たりと感ず。今に至りてこれを思へば未だ曾つて面熱背汗せざるにあらず。(中略)僕稟性頑愚といへども隠然として自ら有数の人たらんと期す。而して今は父なく兄なし。良師友も亦得易すからず。嗚呼先生に非ずして誰か能く僕を起たしめん。是を以て敢えて高論を請ふ所以なり」(四七〇)と。これに對して「老兄の性質議論甚だ義卿(松陰)に似たり。吾深く痛心す。必ず義卿を友と思ふ事なかれ。口羽はここを解き得べし。清太は口言ふこと能はざれどもこの味を略々曉るなり」(四七三)という。

このあと松陰の江戸送りの命が下る。松陰はそれを知つてからいろいろ書いているが、その一つに「照顔録」(四四三)がある。東行出発三日前に仕上げたもので、古人の名言義行を摘録しこれに評や所見・心事を書き加えている。僅か十七条のものであるが、事が史実に関するものであるので、歴史を得意とする久坂に、間違いがなければの検討をしてもらうため、獄に來た増野徳民に示したところ、徳民から、久坂と徳民とが中心になって村塾の門人たちが、正義の歌をよみ、それに久坂が照顔録と名づけようとして聞かされた。余驚いて曰く天はずなはちこれを啓えしか。吾のここを以て実甫(久坂)に附せんとす。実甫才あり識あり。善くわが録をして譏りを免かれしめんとす。嗚呼実甫を舎いて吾れたれにかこれを附せん」(四四九)という。

まことに絶対的な信頼である。

松陰が萩を去ってからの村塾の中心は玄瑞であった。東送前に最も松陰の意をうけて活動し、その運動が失敗に終って入獄していた野村和作は玄瑞に宛てて「私素より不才不智不学に御座候へば（中略）読書万巻古今治乱を究講仕候、生死の機をよく処する様眼力を儘かに仕り度存念、実に日夜精励仕候（中略）私読書の心躰も松陰先生にも未だ是非を伺ひ申さず候処如何これ有り候や御叱正を乞ひ申候」（六三三、安六・七・八）と指導を仰いでいる。入江杉蔵も亦玄瑞からの獄への書物の差入れを感謝すると共に「先生去りて後は実に詩思虚になりて読書を勉め申し候唯夜読を廃するは残念なり」（六三三、安六・七・二五）と語っている。杉蔵にとっても頼むところは玄瑞である。杉蔵から玄瑞に宛てていう。「実に吾輩これまでは一事もなしたる事なし。生き残り候はば後年一度一踏み込み事をなすつもり。今日はその躰錬より他事なし。師の心も是なり、もし連坐といふて来たならその時白洲にて大義を述べつくし、舌頭にて奸賊を誅し、神国の鬼となるばかりなり（中略）思父（品川）は杉（蔵）の真の兄弟なり。（中略）此間思父へも申置き候師の文稿を残らず一読致したく候間、追々御送り頼み奉り候」（六三三、安六・九・二三）と。これに対し玄瑞は応えていう。「お互に益々憤激勉勵致すべし。実に松陰師の心に負かぬ様致し度く候」（六三七、安六・九・晦）と。

江戸にある松陰は玄瑞を中心としての杉蔵和作兄弟の勉学の状況は知らない。刑死の直前に、高杉宛の手紙に書いている。「実甫は必ず進境あらん。但才勝ちて動きやすし。能くよく御添心下さるべく候」（六三三、安六・一〇・七）又和作に宛てていう。「これを要するに諸人は才氣醒醒天下の大事を論ずるに足らず、長人をして萎びせしめむ。残念々々。足下（杉蔵）と久坂とのみ頼むなり」（六三三、安六・一〇・二〇）と。

松陰の刑死後玄瑞は松陰の信頼と期待に応えるように、若い門下生

たちの指導を考えて杉蔵と共に松陰の文章を集め、書簡もまとめそれによって勉学することを考えた。二人の間の手紙にこれが示されている（六三三、安六・一〇・一六）。また玄瑞の「九似日記」（二〇三三）は安政六年六月一日から九月六日までのものであるが、松下村塾に門下生が集って松陰の文章を会読していることが書かれている。またもう一つの「江月斎日乗」（二〇三三）は万延元年及び文久元年から二年間の日常がきれぎれに記録されている。この中でも玄瑞を中心に松陰の遺文を会読していることが書かれている。玄瑞は「防長第一流」の予言を着々と実現していったのである。だが彼もまたそれを完成しえずに中道で斃れてしまった。まことに残念なことである。

吉田無逸（二〇三六）

名は秀実字は無逸後に稔磨という。栄太郎は通称、足輕清内の長男、吉田姓は自称。天保十二年正月に生る。嘉永六年十三才で江戸に下り藩邸の小者として仕へた。萩と江戸とを往復すること数度。その間ひそかに文武の修業をした。安政三年十六才の十一月二十五日初めて幽室に松陰を訪い教えをうけた。その後安政五年十一月頃塾に間部老中要撃の計画あり栄太郎もその血盟に加った。松陰の再入獄の命下るや他の七人と共に罪名論に奔走して家に囚せらる。この事によって栄太郎は松陰や門弟らと交を絶った。しかし松陰の刑死後胥徒となり万延元年兵庫警衛の出張の折に亡命し、江戸で旗本に仕え、重く用いられた。その後期することあり旗本への仕えをやめ、文久二年七月藩の世子に見え、罪を乞い帰参を許された。この年十月十七日京都における松陰慰霊祭に参加しこれより勤皇運動を始めた。その後の活動によって文久三年七月吉田松陰に從学し尊攘の正義を弁知し心得宜しきを以て士分に準じ名字を許された。その後幕府と長藩との間に立って種々の活動をした。しかし元治元年六月五日京都の宿・池田屋において密議中、新撰組に襲われ重傷を負い、長州藩邸に帰り自刃した。享年二十四。明治二十四年従四位を贈られた。

栄太郎は明倫館の兵学門下と身内の人々を除けば最も早く松陰の門

に入った一人である。増野徳民と共に熱心に従学した。その六カ月目に秀実字無逸説(三三〇、安4・5・20)の名字説をもらっている。「栄太郎年甫めて十三、始めて江戸に役したまたま墨夷の変あり、深く自ら奮勵し武技を学びて以て効す所あらんと欲す(中略)丙辰(安政二年)の冬余と幽室に謁ひて教を受けんことを請ふ。余試めずに韓退之の『符、書を城南に読むの詩』を以てす。栄太郎とせずして曰く『吾の学をなす、いづくんぞ是をなさんや』と。又孟子の百里奚諫めざるを以て智賢となすを論ずるを読み、悦ばずして曰く『諫めず死せず、何を以てか智賢となさん』と。余頗るこれを奇とし語るに学の方を以てす。栄太郎蓋し内に契るものあらん悉く武技を廢して余に従ひて日夕書を読む。一日名字を以て余に問ふ。余秀実字は無逸を以てこれに応え且つ曰く『汝の苗たる稔にあらず秀にあらず。吾すでにこれを試す、怠らざれば秀いで、則ち実ること許すべきなり。然れども秀や実や誠にやすからず。すなはち耘りすなはち廩る。これ獲りこれ積む。それ無逸にあるかな。抑々吾聞けり、李唐に段大尉秀実と名のるものあり。近時又蒲生君藏先生あり。亦秀実と名のる。二子は皆豪傑なり。汝退いて二子の伝を読まばそれ必ず無逸の然る所以を知らん』と。符は韓退之の子、稔も秀も雑草、耘も廩も草をとること、要は稲を立派に育てようと思へば無逸すなわち怠けてはいけないの意である。初対面の栄太郎が学問の志をどのように受取ったか、また松陰の説いた学問の方法をどのように受取ったか明らかではないが、日夕読書したのである。その具体的な勉学状況はすでに前述した。そうした勉学の半歳の姿を見て書いたのがこの名字説である。この名字説をもらって栄太郎はすぐ右の二人のことを調べ、それを松陰に示したらしい。松陰はこれを喜び、「跋両秀録」(三三三)を書いて与えた。これから三月あとに、栄太郎は胥徒として江戸に行くことになった。このとき彼に上張地一を与え、自分のあとを継いでくれよと次のように言っている。

「貴所ならでは孰れか微志を継ぎ申すべき、兼ねても申し述べ候通り別にその人あらば貴所力を添えられよ。もしその人なく候はば貴所が即ちその人と存じ候。此度御身上も少しく、くつろがれ候事につき、何卒天下国家の為と存ぜられ候て拙者心願の筋御取継ぎ下され度く頼み入り候」(三四三)そして江戸の友人長原武に栄太郎を紹介している。「この度この書を託し差出し候人物、吉田栄太郎、僕旧来縁故これあるものにて、身分は輕賤に候へども頗る志気ある故、僕の視ること阿弟の如し。何卒御門生の列にお加へ御教導頼み奉り候」(三四六、安4・9・2)と。このように松陰は栄太郎に大きな信頼と期待をかけていた。しかし当時の栄太郎は家の借金で勉学の自由がなかった。「悲しい哉、終に師の名を汚す、私俗物となり候へば父母親戚の不平解け申候。父の不平も解けて家内家中丸く相成り申候、父の心中には学問させ度く思はれ候へども当座の借金のがるべからざる勢ひゆへ致し方なく」(三四六、安4・12・25)と松陰に訴えている。そして江戸に発つ前には三人の不良少年を松陰に託した(三三三)。そして翌安政五年の五、六月頃に帰萩した。しかし家庭の状況から松陰のもとには行っていないらしい。「無逸足下、帰計決せり、吾の喜び是に於て知るべきなり。心緒万般、渾べて対晤を待つ」(三四三)といい、次のように手紙を出した。「今日の時勢迫切す、一日と雖も惜しむべし(中略)時去り勢は過ぐ、然る後悲愁する。亦また何の益ぞや。足下の前計甚だ失す。蓋し才を恃むの過なり。足下、誠に才なり。然れども天下恃むべくして恃むに足らざる者才にしくものなし。而して足下の翻然として善く前局に変わる是れも亦才の美なり」(三四四、安5・6・28)栄太郎は才にすぐれている。しかもその才が栄太郎の行動を誤らしめると指摘する。それを知ってばっと転換するのも栄太郎の才であるという。ここで転換して塾に来たかどうかは明らかでない。折返し栄太郎は江戸に行つた。これにつづいて杉蔵も江戸に出た。杉蔵は松陰や塾のことを栄太

郎に話している。そのことを松陰に江戸から手紙を出している所から見ると、転換して村塾に行ったと考えられる。「塾中富永先生始め大奮発の段、杉蔵一々申し聞かせして大喜悦奉り候（中略）杉蔵頭のジンジンする事ばかり申し聞かせして誠に有りがたき御事と存じ奉り候」（六七、安五・八・八）安政五年の六、七月頃は松下村塾の最盛期といわれる時であり、六月十九日の日米通商条約を結んで世論も亦湧いていた。松下村塾には藩府から七月廿日付を以て家学教授が許された。これらのことを杉蔵が語ったのであろう。

このあと栄太郎は萩に帰り塾にも出入していたようである。この頃松陰の言動も激しくなっていき、九月九日には松浦松洞に水野土佐守暗殺策を与え、廿八日には大原三位下向策を伊藤伝之助に持たせ、或は十月には赤根武人をして伏見の獄を毀つ策を授けた。自らは十一月六日同志十七名と血盟して老中間部詮勝を要撃せんと策を立て藩の声援を求めた。こうした事から藩の当路者は困り、遂に松陰を一室に敵囚するよう、父に命を下した。さらに十二月五日には借牢による投獄の命となった。これに対して栄太郎ら八人の門下生は松陰投獄の罪名を明らかにせよと藩の当路に迫った。このことよってその八名はそれぞれ組預けとして家囚になってしまった。栄太郎は再び親や親戚のつよい反対にあつたらしい。それを知って松陰は再入獄の前夜栄太郎をその家に佐世・増野とともに訪ねた（六二至六三）。しかし栄太郎は「牙算（ツノ）を抱き吾輩を睥睨していふ。吾輩は俗吏を学ばんとするのみ、此言耳に入り、終に忘るる能はず」（四一六）という状況であった。やむなく松陰は「両叔皆俗物の胥徒、亦いぢめる様子（中略）然れども一旦は俗吏にならねば両叔必ず折合申す間じく」（六一三）と妥協の気持を示してやったが、次の短い返信でもって栄太からの音信は切れしてしまう。「過日は御枉顧ありがたくその節縷々御暇乞ひも申しあぐべくと存じ奉り候へども阿嬢泣涕の声を聞き僕も堪ふる能はず、終に

早速かがみ、大いに遺憾に候」（六一五、安六・一・七）と。

松陰は栄太郎の復帰を願って次のように書いた。「無逸足下、何如の情態ぞや、吾の投獄以来念々足下にあり。而して未だ一書をも致さず（中略）足下の質は非常なり、足下の才は非常なり、憂ふる所は学問足らざるのみ、唯願くは古書を読み、古人に交はり、古人の為すところを為し、古人の思ふ所を思へ。得るあらば教へられよ」（四二二、安六・一・二三）栄太郎を信頼し期待する松陰の心情がよくわかる。そして四日後に入江宛の門人評の中で無逸について次のように言っている。「無逸の識見は暢夫に彷彿す。但し些か才あり。是大いにその気魄を害す、気魄一度衰ふれば識見亦昏し。嘆ずべし嘆ずべし。（中略）前日の絶粒の事の如きは（中略）試みにこれを無逸に語らしむれば、無逸は微笑せん。固より吾の慮の短きに非ず長ぜざるを知らばなり」（四二四、安六・一・二七）と。この人物評も何らかの形で栄太郎も見ているに違いない。然し栄太郎から松陰への反応は何もなかったようである。二月十二日には「無逸の心死を哭す」（四二五）を書いた。「無窮無咎に囑す、余に代りて好香一抹を焚き、村塾諸生を率い、往いて無逸を哭送せよ、至痛至恨」（四二五）と。しかし無逸からの反応はなかった。栄太郎への信頼や期待はくずれはしなかったがその離反は堪えがたかった。杉蔵に宛てていう。「午後頭痛にて一睡仕り、無逸端なくも夢に入り来たる。醒後又々感癖を発し落涙禁じ難く候（中略）帰囚後第一得たる無逸が又叛き去りて呉れては実に情に堪え申さず候、無逸生得の奇気学問、師友を借るものに非ず。（中略）さればとて無逸を無理に吾が流儀に引付けようと云ふにはあらず、只々天地の間に不朽の人に成つて呉れたら我に叛くも可なり我を罵るも可なり（中略）要する所一見知己として死生を同じうんせんと思ひ心事を吐露した無逸、天地の間無名の男児にて死んで呉れるが残念なといふことなり」（六三三、安六・二・一五）裏をかえしていえば松陰は無逸はきつと天地の

間に有名になり、立派な男子としての死生を送ると信じているわけである。しかしこの期待にもかかわらず、松陰の東送の折にも帰らなかつた。江戸に到着した時も無逸は現われなかつた。松陰の方は刑死を前にしても、無逸の帰来を信じ、その信頼と期待とは変らなかつた。

江戸獄から在江戸の高杉に宛てていう。「栄太と天野は同志中にも別ものなり。老兄深く顧みて呉れ玉へ（中略）栄太の心中誠に憐れむべし。かれ自ら曰く復た慈母の涙眼を見るに忍びずと。其言甚だ悲しむべきなり。而して才智あり、唯小生一面して志を言はざること残念なり。この間多少血涙の談あり、吾栄太を愛すること昔日の如し、栄太吾の愛する所となるは却つて禍根たるを洞視して吾を疎せんと欲す、吾深く栄太が心事を知れども栄太遂に棄て難し。旧臘二十四夜コウセンを一杯呑みて栄太と別れしは永訣かも知れざるなり」（不三〇四、安6・10・7）

松陰刑死の翌年、無逸は亡命している。嘗つて松陰は彼を陰頑と評した（不三二四）が全くその通りで、遂に松陰の死の前にその志を言わなかつた。その二年後藩に帰ることを許され文久三年に士分に準じて名帯刀を許された時、彼は母にあてていつている。「私事もこれまでには実に何の御役に立ち候事もこれなく吉田先生の御影にて少々ぐず申し候て実にはづかしき事ばかりに御座候（中略）先づ一番に吉田先生におみきおさかなおあげ成らせられ候。偏へに先生のおかげに御座候」（不三〇四、文元・6・22）と。かくて時期こそ遅れたが、松陰の信頼と期待通りに復帰した。

だがその活動も中途にて新撰組に襲われて斃れてしまった。二十四才であつた。

入江杉藏（二〇二五）

名は弘毅、字は子遠通称杉藏、後に九一。天保八年四月萩に生る。足輕の長男で、弟は野村和作。十三才の時御蔵元の胥徒となり、十七才で福原冬嶺の門に入

る。安政三年父を亡う。安政四年三月江戸藩邸の胥徒となる。安政五年七月江戸から帰り、始めて松陰を訪い、十一月十二日に入門した。十二月初の松陰投獄の罪名問題にも奔走し、他の七名と共に家に囚せられることとなつた。その後大原西下策や伏見要駕策に奔走し代つて上京させた弟和作が逮捕せられると共に杉藏もまた岩倉獄に投ぜられた。松陰刑死後も獄中にあり久坂らの援助によつて獄中で勉強し、万延元年閏三月免獄された。文久元年の「一灯銭申合」^(註)にも参加した。文久三年正月松陰に従学し尊攘の正義を弁知し心得宜しきものとして士分待遇せられた。二十七才である。その後高杉久坂らと協力し活動した。元治元年七月十九日の禁門の変に敗れ、久坂らと共に鷹司邸で自刃した。享年二十八、明治二十四年正四位を贈られた。

（註）松陰の死後、門下生たちが国事に奔走し牢につながられるような時に援助或は義士烈婦の碑をたてるための資金を平時より積み立てようとして、写本などの儲を月末に松下村塾に持寄ることを申合せた。これを「一灯銭申合帳」といい、それに名をつらねている。文久元年十二月一日である。これは村塾生らの団結と決意を明らかにするものでもあつた（二〇四三）。

入江杉藏は「松陰師への欽慕は甲寅（^{元安}）時代よりなれど相見たは去年の冬」（不三〇三、安6・10・15）といつている。しかしそれより前の七月十一日に「送杉藏叙」（不三〇三）をもらつている。いづれにしても杉藏が松陰の教えをうけた期間は短い。松陰の側からいえば、嘗つて安政四年の九月に子遠について興味をもつたことがある（不三三三）が会つたのは松下村塾の最盛期のこの時だけで、しかもすぐに江戸へ去つてゐる。また帰つて来た頃は松陰の最も焦慮してゐた時期であり、多くの門下生が敬遠してゐる時期でもあつたから、杉藏へ心をかけたことも深かつたに違いない。年令も二十二才であつた。その送叙にいう。「胥徒杉藏飛脚を以て帰る。帰りて数日、復た又た途に上らんとす。杉藏胥徒の微を以て慨然天下の事を談じ、急遽造次猶ほ能く吾徒に従ふ。議論を上下し娓娓として倦まず、其志亦奇なり。而して其説亦頗る吾と同じ。吾深くこれを喜ぶ（中略）吾の甚だ杉藏に貴ぶ所はその

憂の切にして策の要たる吾の及ぶ能はざる者あり(中略)今日の事誠に急なり、然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず。其れ唯、積誠之を動かし然る後に動くあらんのみ(中略)と。杉蔵の志の奇なることその思慮が切実であり、対策が要をえていることに大きな信頼感をいだいたのである。この送叙をもって杉蔵を紹介し(六九、安5・7・10)また政府の要人前田にも(六三、安5・7・12)また家老にも紹介し、養子に入れるよう依頼している(四三、安5・9・16)。また江戸の来島又兵衛にも「天晴諫死の出来る男」(六六、安5・10・19)だからと養子の世話を依頼している。こうした信頼をもつに至ったのはそれ相当の根拠があったに違いない。八月に江戸に着いた杉蔵は柴太郎に要をえた話をしたに違いない。先にも引用したが、「杉蔵頭のジンジンする事ばかり申し聞かせ」(六七)たというのもそれであろう。松陰と語った時間は短かったが、松陰の言の本質を掴んでいたのに違いないし、それを松陰は直感していたに違いない。江戸から帰っての杉蔵は再入獄の罪名問題にも奔走し組預けの処分をうけている。この頃の松陰の苦慮した事件にすべて杉蔵はかかわっている。そうした事件を通じて杉蔵への信頼は益々深まっていったに違いない。これが今迄も幾度も部分的に引用した安政六年一月二十七日付の門人評の手紙になったと考えることができる。杉蔵自身に対して松陰は次のように評価している。「防長絶えて真の尊攘の人なし、吾れと雖も復た尊攘を言ふを得ざるなり。然らば則ち防長唯だ汝一人のみ。切に自ら軽んずる勿れ。(中略)汝の識高く胆大なり。吾の愛敬する所なり。恨むらくは才足らず、学尤も足らず、怨讎の氣過当なり、是れ汝の病なり」(四三)と。杉蔵を信頼し期待するが故に、その欠点も明らかにしなくてはならない。「足下(杉蔵)も佐世も酒婦人を以て愉快を助ることは必ずやめて呉れ玉へ。然らざれば必ず事を損ずるなり。吾れ江幡五郎が事にて深く懲りてをるなり」(六三六、安6・2・15)

ともいい、「僕子遠(杉蔵)を信すること過甚なり」(六三六、安6・2・中)ともいう。欠点のある杉蔵ではあるが過甚と自分でわかるほど杉蔵を信頼しているのである。

このあと二月二十四日日和作が要駕策のために脱藩した。しかし事が発覚し和作は捕えられ、杉蔵・和作の兄弟は岩倉獄に投ぜられた。万延元年三月まで約一年間在獄することになった。この始めの頃松陰と生死の問題について大いなる討論と究明が行われた。この内容については玖村敏雄の「吉田松陰の思想と教育」の一篇「死の教育」に詳論されているので私は省略する。

松陰の東送がきまってきたからの杉蔵を見よう。五月十五日松陰の東送を知って松陰に三通の手紙を送っている。それにいう。「先生関東へ捕登仕るべき由、魂魄飛越す。命なる哉、天なる哉(中略)長門の運ここに極る。天下の運ここに極まる」(六三六)と。またいう。「兄弟一人他年にして先生の志を忘れまじ。先生どふぞ尊攘堂の位牌になり給ふな」(六三六)「杉三、実に先生の知を過分に荷い、感謝感謝、されども從遊日浅ふして、道を聞くこと実に諸友より寡なし、故に此度の行、諸友に倍して残念なり」(六三六)これらの手紙に松陰は一々所感をしるして品川や作間に与えている。門下生や知人が作った松陰の東行送別詩歌集がある(六六三)いつまとめたかは明らかでないが、その跋を杉蔵が書いている。「此集は乃ち同門諸子の心情を吐露するもの」で各人の心のやむえぬ所を歌っている。それによって「先生の常に腸を吐きて人に接し、才を愛するの誠を知るべき」であり、「吾聞く先生の去るに臨みて此集を朗誦す。その意如何あらんや。先生の帰は測るべからず、先生の志を継ぐ者、諸君と吾輩にあらざして誰ぞや」(六三六)と。松陰の信頼と期待に応えるようにその志を継がねばならない。それは自分達だと決意を表出しているのである。

江戸獄に移ってからも松陰の杉蔵への信頼と期待は高まる一方であ

り、それに応えんと杉藏も懸命である。「余去るに臨みて、杉藏の思、玄瑞の才、清太(久保)の知、皆吾已上の人なり、三人相愛せよ〜」(六三三)、安6・6・7)と高杉にいった。杉藏は玄瑞こそ頼りである。前にも引用したが、「実に吾輩これ迄は一事もなしたる事なし、生き残り候はば後年一度一踏込み事をなす積り、今日のその胆錬より他事なし。師の心も是なり」(師の文稿を残らず一読致し度く候間追々にお贈り頼み奉り候」(六三三、安6・9・30)と松陰の信頼と期待に込えんとしている。この杉藏もまた中道に斃れてしまった。

三、明治を前にして殉難した人々

松浦松洞(一〇三三)

名は温故字は知新、後無窮と改めた。通称亀太郎。松洞は号である。天保八年萩松本の魚商の家に生れた。後藩士根来主馬の家臣となる。幼より絵事にすぐれ神童といわれた。關西涯に学び後京都の小田海儒に師事した。安政三年末松陰を幽室に訪ひ詩法の指導をうけた。やがて尊皇愛国の人となり、忠孝節義の人を訪ひて描き、風教のためにしようとした。松洞は増野徳民・吉田栄太郎と共に最も早く教をうけた人である。安政五年京都に上りさらに江戸にゆき、芳野金陵にも学んだ。安政五年幕使に従いアメリカに渡らんとしたが実現できず、六年二月に帰国した。五月松陰の東送がきまつて松陰の像を何枚か描いた。松陰もこれに賛した。松洞は松陰殉難後も村塾生と交わり、文久元年の「一燈銭申合」にも参加し尊攘に奔走した。文久二年長井雅楽の公武公体論に怒りこれを刺さんと謀ったが諫止され、憂憤の余り四月十二日粟田山にて自刃した。享年廿六、明治四十四年正五位を贈られた。

松洞の松陰とのかかわりは安政三年に詩法を聞きに来たことに始まる。「余に踵りて詩法を問ふ。余性狂癡にして風流文雅一も心に入る所なし」といいつつ漢詩の古典をあげて詩法を語った。そして「吾もこのごろまた生を叩くに画法を以てす」(三二六、安4・3・12)と画法を教えてもらった。この頃栄太郎・徳民たちが松陰の教をうけていた

が、松洞も加わって互に韵を分つて詩を作っている(三三二、安4・3・23)。松洞は「画を善くし詩に工みにして、別に志操を存すれども書を読むこと博からず吾故に無窮を以て勉めしむ」(三三九、安4・8)と。この八月十日に「飲餞松洞」(七三三)されて、下関・九州へ人物描写の旅に出ることになった(五三〇)(三三三)。九月三日に「折煙管記」(三三三)の一件があったが、その文の末尾に次の一文がある。「無窮の西より帰るや勢風雨の如く吾党を圧してこれをしのがんと欲す。直ちに吾戸を排し余に向ひて曰く『大丈夫は大事を立つべし。書を読み何をか為す』と。余曰く『幽囚無事書を読まずんば以て消遣するなし』と、無窮言屈し乃ち転じて有隣を攻めて曰く『聞く公煙管を折ると、煙管何ぞ公の事に害ありて乃然るや』有隣曰く『亦一時の客氣のみ』と。無窮以て難するなし。則ち亦管を折りて曰く『吾もしばらく書を読まん』と。これはこの年の十二月二十日のことである。下関及び九州の人物描写の旅から帰つてのことである。これからみると安政の四年頃には松洞は無窮として勉めよといわれながらも読書する学問はあまり行っていないかたかと考えられる。

安政五年三月に松洞は江戸に上ることになった。松陰は江戸の長原武に紹介(六二三、安5・2・28)しさらに「無窮説、送無窮東遊」(四二七)を三月三日に書いて与えている。この中にいう。「吾と松洞と交りて三年なり、初や以て画師となり、已にしてその書を好み歌詩を喜ぶを知る。今は則ち隠然たる有志の士、国家を以て憂となす。是吾の三年の交りに三たび品題を易ふ」と。学問そのものはそれほど急に進んだわけでもないであろうが、その志とそのあり方に変化をみとめそれに期待したのであろう。

安政五年六月十九日日米通商条約が結ばれた。これに關しての江戸における情況を知らせた。この中に水戸・越前の二公は違勅の条約締結に「一向御憤懣なき事感心なり」という松洞の意見に対して「僕甚

不満なり」(六六六)といい、さらに天下のあるべき姿をのべ、その元凶である水野土佐守を暗殺するように示唆した。水野土佐守は紀伊の附家老で、將軍継嗣に成功し、蔭の実力者として、違勅事件も水野の指導によって井伊大老が実行したものと松陰は解してこれを示唆したのである(六六六、安五・九・九)。これは松陰にとっても始めての実践活動であって、これを高杉・杉藏・栄太郎らに見せて実行せよと示唆したのである。松洞を信頼していなければ言えないことである。

松陰からのこの手紙と入り違いに松洞からその水野或は長井玄蕃頭に従ってアメリカに渡りたいといつて来た(六九四、安五・九・17)。しかし結果的には行けなかった(六二〇五)。結局松陰の示唆も松洞の希望も実現出来なかった。

翌安政六年二月、松洞は久坂・中谷らと共に萩に帰って来た。この頃は松陰の絶食事件のあとで、松陰は多くの門下生に失望を感じていた時期である。しかし松洞は「議論一変」(六三三)して杉藏らと要駕策に参加の気配があったが、結局松洞はまた松陰の指示に従わなかった。「松洞は遂に是れ画史か、吾のこれを過称せしは過也」(六三三、安六・二)と本人宛の手紙に書いた。一月二十七日の「与子遠」の人物評に「無窮才あり気あり、一奇男子なり、無逸の識見に及ばざれども実用にはこれに勝れるに似たり」(四三三三)といったことを過称と云ったのであろうか。同時期に示した人物評であるが経過からみて、後者を本心とみてよいであらう。

このあと野村和作の失敗、松陰の死生観と杉藏・和作とのやりとりなどは松洞も知っていたであろうが、松洞は遠ざかっていたようである。五月になって松陰の東送が明らかとなり、松陰像を描くことになる。

松陰の東送後は塾に通って他の者たちと共に勉強した(六四三、安六・11・28)。そして略伝にあるような最後を遂げることになる。松陰の生

きている間にその期待には沿いえなかったが、品題の最後に示した松洞の人間像にあるように、その生涯を閉じたことはその期待に沿ったものともいうことができよう。

有吉熊次郎(二〇九五)

有吉名は良明字は子徳、天保十四年長藩士近習伝十郎の次男として生れた。明倫館に学び安政五年十六才の春に松陰の門下になる。安政五年十一月間部老中の要撃策の血盟に加わり、叔父某の家に綱せられたが、十二月の松陰の罪名問題に奔走し、遂に家に囚せられた。後文久元年高杉と共に江戸に下り、有備館で勉強した。文久二年の「一灯銭申合」には高杉と共に記名されていない。在江戸の關係かも知れない。しかしこの年の品川御殿山英国公使館焼打には加わった。文久三年藩命により航海術を学び京都の学習院にも学ぶ。元治元年の禁門の変には久坂らと行を共にし鷹司邸で自刃した。享年二十二、明治二十四年正四位を贈られた。

作問忠三郎(二〇一五)

作問名は昌昭字は子大、刀山とも号した。天保十四年長藩士寺島太治郎の次男として玖珂郡高水村に生れた。安政五年八月、十六才で松陰の門下になる。五年十一月の間部老中要撃策に加盟、松陰の罪名問題に奔走して家囚となった。松陰の処刑後も松下村塾に学び「一灯銭申合」にも参加した。文久二年春久坂らの上京に従うために亡命し、十月には京都で松陰慰霊祭を行いその祭主となった。後京都学習院に学んだ。この頃より寺島姓を用いた。志士としての活動も行い、元治元年の禁門の変には久坂らと行動を共にし、自刃した。享年二十二、明治二十四年正四位を贈られた。

有吉は安政五年一月十七日に、作問は同年八月十七日に松陰の兵学に入門した(九五五)。共に十六才である。有吉は入門早々撃剣が出来ると松陰に知られ(四三三)、そして塾にも寄宿し、「村塾寄宿生有吉熊次郎頗る読書出来そうなり。気あり」(六三三、安五・六・19)と認められていた。

この年十二月十一日、三才年長の岡部富太郎(子楯)と併せて「子楯

「子徳子大説」(四六)が作られている。

「良明字は子徳、有吉質直気あり、もと読書を以て業を建てんと欲す。今は乃ち慨然として相従ふ」(四六)

「昌昭字は子大、作間朴訥、頗る沈毅の質あり、三子皆年甚だ少く、経歴甚浅し、学問未だ達せず而して作間最も甚し。然れどもその昭々たる固より已に誣ふべからず。今より日に累ね月に積み、之を大にし又これを大にすれば以て天に至るべし」(四六)

二人への名字説であって、二人の現状批判と将来への方向づけをしている。しかもこの二人はともに俗論の中にいた。「有吉熊次郎、その叔父は白根多助といい、もと雲州家来にて俗論者故頻りにいぢめる様子、白根は御所帯御帳方たり、随分俗吏才子の様子」(安5・12・28補足)と桂宛に語られている。また「子徳は満家俗論、恐らくは自ら持する能はざらん。然れどもその正直慷慨、未だ必ずしも磨滅せざれば則ち時ありて発せん」(四六、安6・1・27)と。

一方子大については「子大俗論の中に在り。顧ふに自ら抜かん。篤信と謂ふべし。亦些か頑骨あり、愛すべし」(四六、安6・1・27)と。しかし共に俗論の中から苦勞しつつも、立派に事をなす人物だと期待している。しかし先輩の久坂や高杉の援助が必要であると見て、その指導を依頼している。久坂には「兄ら福原・作間・有吉など仰せ合され折々夜往いて読書にてもしてやり玉へ」(六三、安6・4・11)といひ、高杉には「徳民・作間兩人、弥次と全く同意此三人少年と雖も恃むべし(中略)有吉なども相信する様子」(六三、安6・5・13)と。有吉と作間は先輩の指導のもとに松陰の期待にそうよう成長していったようである。二十二才の若さで共に、久坂に征って自刃していった。

玉木彦介(二〇二七)

玉木名は正弘、字は毅甫、松陰の叔父玉木文之進の嫡子で、天保十二年に生れた。幼より父及び松陰に学ぶ。松陰の「士規七則」は彦介のために書いたもので

ある。安政二年父に従い相模に行き江戸に遊ぶ。安政三年帰国し松陰の幽室起居を共にして学ぶ。文久三年世子定広の近侍になる。元治元年長崎に学ぶ。十一月帰国、禁門の変により多くの松門の士が戦死又は斬られた。彦介も小郡に潜伏し、慶応元年の高杉らの活動に参加し恭順派と戦ふ。不幸この戦いの中で重傷を負い、歿した。二十五。明治三十五年正五位を贈られた。

松陰の書いたものの中に彦介の名が出て来るのは嘉永四年六月江戸遊学中の松陰から叔父玉木への手紙である。この時彦介は十一才である。彦介の壮健を喜ぶ文のあとに「武士は壮健にそだち申さず候ては物の用には立たざるは勿論なり。尚亦十余歳になり候ては根気強く物に堪え候様の修行肝要と存じ奉り候。然るところ壮健とは常に相因るものに付き何分その御心得申も愚に存じ奉り候(中略)安きにゐて危を忘れずかの堅忍壮健御求めさせ専一に存じ奉り候、此らの事は毎々御高論承り居候事なるに今更申上げ候は所謂釈迦の前の説法にて不遜にも中り恐入り奉候得共」(五五)と叔父に向って言うのは、彦介にすでに何か問題を感じていたのか、単なる教育者的な意見からであったか。私は前者ではなかったかと推測する。このあと松陰は東北亡命によって帰国しその屏居中にも、十二才の彦介は松陰の教を受けていたことは「睡餘事録」(五五)にも明らかである。そのあと下田踏海事件で萩の野山獄に帰って来て松陰は、十四才の彦介に働きかけ「弘字毅甫説」(三〇)や「士規七則」(三三)の出来たことは前に触れた所である。彦介は安政二年正月二十日から父文之進の相模成衛について相州に出た。この時彦介は日記をしるし、その評を松陰に乞うている(二〇二七)。だがその評も単純であり、評というべき評でもない。彦介は安政三年二月萩に帰りまた松陰について学んでいることは「野山獄読書記」(五五)、「丙辰日記」(五五)、「丁巳日乗」(五五)にも明らかである。しかし彦介の書いたものは前の日記以外にはない。松陰の東行前に寄せた「松陰先生東行送別詩歌集」(六三)に彦介の長詩一篇がの

っている。その中の後半をあげると

義士憤世多囚累 時勢近日奈無為
君今向東為何事 安然復就幕獄糜
一誠貫徹乾坤動 幕議或幸可轉移
大樹一繩若難繫 身否道享復何悲

この詩の中に彦介と松陰との特別の人間関係を表現しているものは見当らない。松陰の百日祭が萩で行われた。この時に彦介は名を連ねている(九六三)が、これ以外に彦介の名が出ていないのは何故だろうか。弘字毅甫説や士規七則が書かれたがそれが、前述にもあるように一般論であって彦介の人間像にもとづくものでなかったにしても、身内としての信頼や期待があったに違いない。有吉や作間・品川らが彦介よりも二才年下であったからかも知れないが、松陰の心を使った様子は到底彦介の比ではない。彦介は玉木叔父の唯一の嫡子であるということのためか、或は玉木叔父への信頼のためか、高杉・久坂・杉蔵らへの手紙にも一度もその名が出ていない。嘉永四年の叔父への手紙のあり方からすれば、彦介が人物であったら、決して松陰は見逃さなかったのではあるまいか。松陰の刑死後に村塾に学んだものの名は久坂の「九似日乗」(二〇四三)「江月斎日乗」(二〇四四)や高杉の日記類(二〇四五)に出ている。或は「一燈錢申合」(二〇四六)にも出てくるのに、玉木彦介の名は出て来ない。だが最後は高杉の側に立って戦死していったのである。

時山直八(二〇一五)

時山名は養直、長藩士の家に生れた。幼より文武を修め、安政五年三月、十七才で松陰に入門し、六月頃より時々村塾に宿泊して学んでいた。安政六年江戸に出て安井息軒にも学んでいる。文久二年頃から藩の仕事にかかわり元治元年の頃は浪士取締役を命ぜられた。この年奇兵隊に入り、その後その参謀にもなった。明治六年には幕軍を追って北越に転戦した。その五月十一日越後朝日山で戦死し

た。享年三十一。明治三十一年正四位を贈られた。

時山直八の名が松陰の文に出て来るのは、安政五年三月四日である。「直八折々塾へ来て食を炊いて宿する組の者、中々の奇男子なり愛すべし」(六三三、安五・六・19)といわれるのはその三カ月あとのことである。村塾の勉強が活発になり、須佐の育英館との塾生の交流のあった時、その中に直八がいた。従ってこうした動きの中から「奇男子なり」と信頼し期待する所が生れたものと考えられる。このあと「佐々謙・岡部・提山など少しく奮励、直八は勿論」(六四四、安五・六・28)とか「是より先、直八も上京、是は程なく帰来なるべし」(六六七、安五・七・27)などと消息的に直八の名が七々八八出てくるが、安政六年一月の人物評には「直八・小助の氣」(四三三)とだけ出てくるにすぎない。百日祭には参加している。久坂の「九似日記」「江月斎日乗」にも塾に来て勉強していたことがわかる。しかしさほど頻繁ではなかった。

松陰の教育事実としては明らかではないがその名の幾度も出るだけに、ある信頼と期待とがあった事は考えられる。

四、明治に名をなした人々

明治に生き残り名をあげた人々として、巷間に知られる人々は伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎・野村靖・天野清三郎後の渡辺嵩蔵である。これらの人物と松陰の教育事実を考察しよう。

天野清三郎(渡辺嵩蔵)(二〇六六)

天野名は寛、松陰が後起雄と呼んだことがある。安政四年冬、十五才で松陰の門に入る。松陰の歿後は長藩の海軍所に入り、又高杉晋作の奇兵隊創立にも奔走し国事に尽した。慶応三年英国に留学し造船術を研究し、明治七年帰朝、工部省に入り、ついで大阪司検所長となる。後長崎造船所を創設し、わが国の造船界に貢献した。在官中従五位に叙せられ、昭和十四年九十七才を以て歿した。

天野清三郎については先にもとりあげているので、できるだけ重複をさけて検討しよう。天野の入門は略伝では十五才、安政四年冬とあるが、記録では明らかでない。本人の記憶では有吉に誘われたというが、有吉の入門は安政五年の春であり、熊次郎と共に天野が塾に入った安政五年五月十七日の記録があるから(六三六)これより遠くない時の入門であろう。そしてその一カ月あとに「天野清三郎中々の奇物他人未だ深くはとらず、僕独りこれを愛す」(六三六)と評せられている。十二月に天野は次の一詩を作っている(四一六)。

凜冽梅花埋雪中 暗香馥郁遠相通

他時果有探尋客 知是将来後起雄

これから松陰は天野を後起雄と呼んでいる(六三六、安6・1・16)。また先にも引用したが敢えて重複して引用すると「天野は奇識あり、人を視ること蟲の如くその言語往々吾をして驚服せしむ。誠に李卓吾の如きを得てこれを師とすれば、一世の高人物たらん。恐らくは遂に自ら是としてその非を知らずして死せん。吾が交遊中に於て暢夫・日孜(品川)を除く外、その意に當る者なしと。噫奇識なる哉」(四一五)期待するところは大きいけれども、松陰にも手にあまる人間だったようである。しかし高杉と品川には心をゆるしていると知り、高杉にその指導を依頼している。「天野情三郎、この生昨年已来一事も吾説に同意せず、奇見異議、他日必ず異人とならん。この人深く老兄に服す。その他一人も服する人なし。僕遂にその才を竭す能はず、足下幸にこれを心に記せよ」(六三六、安6・2・15前)そして松陰の東送が明らかになった五月十九日、敵子陵の詩を示し、子陵が天下第一流の志をもっていたにもかかわらず、鄧桓らに先鞭をつけられ、「その下に立つことを欲せずして枉げて加脚一著を為すのみ」と説明し、清三郎、お前も子陵以上の人となれ、しかし「清三の後来、果して如何なるやを見る能はず」(七五二)と書き与えている。松陰に同意せぬ天野だが、

その能力を信頼し期待しているわけである。江戸に出てからも、「采太と天野は同志中にも別ものなり。老兄深く顧みてくれたまへ。天野少しく才を負み勉強せず、是れ惜しむべし」(六三四、安6・10・7)と高杉に依頼している。

松陰の刑死後の門下生たちの勉学のさまが久坂の「九俣日記」「江月齋日乗」に出ているが、天野の名は二カ所しか出ていない。「一燈錢申合」にも天野の名はない。いわゆる村塾生たちの勤皇運動にも参加しなかったようだが、高杉の奇兵隊創立には協力したし、高杉が上海に出たのは文久三年だから、この年から五年あと即ち、高杉の死んだ慶応三年に英国に渡ったのも高杉に示唆されたのかも知れない。もしそうであれば高杉が天野にとって李卓吾になったことになる。

山縣有朋(二〇三三)

山縣名は小助、小輔ともいった。父三郎は藩の輕卒、早くより文武に志し、大いに努力した。安政五年十九才の七月、藩命により、松下村塾の塾生杉山松介・伊藤利助・伊藤伝之助・岡千吉らに共に京都の情況偵察に赴いた。京都で久坂玄瑞に知られ、その紹介によって九月の帰国後松陰の門下となった。松陰に師事した期間は短い。高杉晋作の奇兵隊の軍監となり、その後次第に名をあらはし、明治政府の高官になった。明治大正時代を通じての重臣となり、公爵を賜わり、大正十一年二月歿した。享年八十五、国葬を賜わっている。

松陰が山縣小助に興味をもったのは安政四年九月であって、三田尻の国学者への手紙の中で、「文中入江子遠・山縣有朋二子あり。(中略)而して有朋とは如何なる人たるかを知らず、願くは之を教えられよ」(三三三)ということからわかる。このあと安政五年七月二十六日に京都へ「飛耳長目」即ち今日の情報係として六人の若者が派遣される時、この中の四人までが松陰門下で、他の二人の中の一人が山縣であった(四〇六)。本人の述懐によるとこのあと杉蔵と松介の推薦で松陰門下になったという(二〇六三)。九月頃らしいが明らかではない。しか

もどのような指導をうけたかもわからない。山県の文も残っていない。従って安政六年一月二十七日の門人評の中で「直八・小助の氣」(四三三)と語っているが、どこからそれを発見し期待したかは明らかではない。当時の門下生の中では彼は二十才であったから年長者ということができよう。松陰東送のきまった時入江杉藏が、小助を護送役人の一人に加えてはどうか、小助も辞退はすまいと松陰の意向を尋ねているところからみれば、塾内での地位は高くはなかったにしても信頼された人物であったと考えられる。然し後の公爵になるほどの人材であるとは松陰も予想はしていなかったと思う。然し「一燈錢申合」にも参加し、久坂の「九似日記」「江月斎日乗」にも小助の名が出ていたので、松陰死後の勉強が大きい意味をもっていたのかも知れない。だが山県の心の中に松陰を師として仰ぎ、彼の心の中に松陰の言った「氣」が予言としてどれだけ生きていたかは明らかではない。

伊藤博文(二〇二〇)

俊助・利助・俊輔の名あり、天保十二年九月、熊本郡に生れ、九才の時父母と共に萩に移った。十四才の時、父が伊藤家の養子となり姓を伊藤と改めた。安政三年十六才の時、来原良蔵の手附となり来原のすすめにより、安政四年九月松陰の門に入った。翌五年十月来原に従って長崎に赴き、翌六年六月帰国した。さらに十月桂小五郎に従って江戸に出で着後間もなく松陰の処刑にあった。桂・尾寺・飯田らと共に松陰の遺骸を回向院に葬った。その後の勤皇運動には概ね桂小五郎に従った。文久三年松陰に従学し心得宜しとて士分にあげられた。これからの彼の活動には本人の努力もあり運もあって、外国に渡る機会もって明治政府では次第に要職に進み、明治四十年には公爵を賜わり四十二年十月ハルピン駅頭で凶弾に斃れた。享年六十九。従一位を贈られている。

伊藤が安政四年九月に入門したという文献は明らかではないし、この時から安政五年十月までの間どのような勉強をしたか明らかではない。安政五年は村塾の最盛期で多くの門人が出入していたであろうが、その中で「利介また進む。中々周旋家になりさふな」(六三三、安五)

6・19)と語っている所から、頭角を現わす人物になりつつあったといえよう。来原の手附として長崎に行くときには、松陰は肥後の轟木武兵衛へ紹介して次のように述べている。「この生伊藤利輔と称する者は胥徒未役なれど反って好みて吾徒に従って遊ぶ。才劣にして学稗きも質直にして華なし。僕頗るこれを愛す」(四六六、安五・10・8)と。このような信頼を示しているにもかかわらず、伊藤は松陰に手紙を出すことも、情報を知らせることもなかったらしい。小田村宛の松陰の手紙に「利輔帰り筑前の事何とも聞へ申さざるや」(六三三、安六・1・27後)と問うている。安政五年七月二十六日に京都へ「飛耳長目」に発った中にも伊藤がいるが、京都から松陰へ手紙を出していないし、帰国後に情報を伝えることもしていない。嘗つて「中々周旋家になりそうだ」と言った松陰の判断とは少し違っているようである。利助の文も松陰の利助への文書の少ないもの、利助のこうしたあり方にも関係があるかも知れない。それに松陰の最も焦慮燃焼した安政五年末から安政六年の始の間、伊藤は長崎に行っていたということも関係があるかも知れない。

「留魂録」(四三三)は松陰刑死直前に書いたものであるが、この頃江戸にいて、桂に従っていたので、この中に伊藤の名が出、かつ回向院の埋葬一件にもかかわっているが、果して伊藤の自発的な意志で関わっていたかどうか。処刑後には松陰の着物や書物なども見付け、久坂へ送り届けている(六三三、万元・11・25)。いかにも周旋家らしいが、江戸在獄中に松陰を訪ねてもいないし、情報を知らせる手紙も出してない。松陰と伊藤との間には人間的なそして教育的な関わり方はどうも薄いように考えられる。松陰亡き松下村塾の勉強には参加しているが、熱心な様子は見られない。

明治二十四年十月松下村塾を訪れた伊藤博文の詩がある(九六三)。

道徳文章叙尋倫 精忠大節感明神

如今廊廟棟梁器 多是松門受教之

この詩には明治政府へ棟梁となる人物を村塾生から多数輩出したこととは歌われてはいるが、伊藤が自ら教え子としての松陰への敬慕の情を読みとることはできない。

嘗つて伊藤が周旋家になりそうなどといったこと、才劣学穉・質直華なき利助を愛するといったことは、他の門下生への信頼感とは隔りはないように思へる。周旋家とは見たが明治政府の棟梁となるとは松陰も予測は出来なかった。一方また伊藤も松陰に心をゆさぶられるような事件にもぶつからなかった。この双方のかかわりが、松陰と伊藤との間に一枚の紙を隔てているようなもどかしさを感じさせているのではあるまいか。

品川弥二郎 (一〇一三)

品川名は日孜字は思父、通称弥二郎、天保十四年閏九月萩松本村に生れた。足輕弥市右衛門の子、幼より佐々木古信に学んだ。安政四年十五才で松陰の門に入った。翌五年十一月間部要駕策に加わり、松陰投獄の罪名問題に奔走して家に囚せられた。入獄後の松陰のために奔走し、松陰処刑後は久坂らと切嗟し、志士に交わり、文久二年十二月の英国公使館焼打事件にも参加した。文久三年正月吉田松陰に従学し、尊攘の正義を弁知し志行嘉すべきを以て、士分に列せられた。元治元年の禁門の変には二十二才で参加したが無事帰国した。その後桂小五郎らに従い勤皇運動を行った。明治政府になってからは次第に要職につき、明治十七年子爵を賜わり、明治三十三年二月歿した。享年五十八。正二位勲一等を贈られた。また品川は産業組合を設立し、松陰が入江に託した尊攘堂を明治二十年京都に建てた。その後これは品川の遺志で京都帝国大学に献納された。

品川は安政四年九月に甫仙と共に次の一句を松陰から書いてもらっている(四一四三)。

不掬糞水不能成善農 不断筋脉不能成善工
不傷肩背不能成善賈 不踏死地不能成善士

また安政四年十一月二十四日「与松浦無窮」の一文の中で「品川・馬

島・妻木・国司・飯田の五生皆成童にして而下俊才(中略)三生五生少年と雖も天下の善工を友とするのは必ず一郷より始まり、天下の英才を育するのは必ず塾生より起る」(三三三)と。この頃の品川は一般の少年と同じ期待しかもたれていなかった。安政五年の四月父が士列に出来ないこととは賀すべきことだが、品川がそんな事のために塾に来ないというので「足下、急々塾に来たれ。安坐することなかれ」(三三三)と呼び出している。また九月二十七日には「弥二の才は得やすからず、年穉きと雖も学幼きと雖も、吾の相待つ則ち長者に異ならず、如何契濶乃ち然るや。時勢切迫、豈に内に自ら惧るるものあるや。抑々すでに自立するや。吾の論にくみせざるものありや。逸遊敖戯して学業を荒廢する則ち弥二の才は決して然らず、説あらば則ち止む。説なければ即ち来れ。三日を過ぎて来らざれば弥二は吾が友に非るなり。去る者は追はず、吾志決せり」(四一五)とって呼び出している。この頃の品川は勉学に余り熱心ではなかったようである。

安政五年十一月には間部老中の要撃策問題があり、十二月には松陰再入獄の罪名問題があった。品川は双方の事件に関わっている。この年の後半からは塾生と共に勉学していたようにも見られる。そして品川の家族たちは俗論で品川の活動を制約していたらしく、杉蔵から品川宛の手紙の中に「御内輪俗論察し申候」(三三三、安五・12・11)とある。この頃松陰は品川に名字説を与えている。その中にいう。「余に問ふに名字を以てす。余曰く日孜、思父を可となすと。而して未だその説あらず、弥治年甫めて成童にして乃ち来たり余を見る。その容色温直敦朴、余一見してこれを異とす。已にして年余、卓々として称すべきものあるなし。而れどもその中、汪然として自ら人と同じからず、余益々之を愛す。(中略)弥治は人物を以て勝り、学問かなはず、(中略)かの『予日に孜々を思ふ』とは大禹の言なり。思ふは知なり。孜々は行なり。知りて行い、行ひて知る、これを日にするは一日に非

らざるなり。(中略) 晋の陶士行言へるあり、『大禹は聖人にして乃ち寸陰を惜しむ』と。それまたこれを謂ひしか(中略) 吾黨の任甚だ重し、志を立つること大なるべし。区々に自足すべからず。たとひ大禹は企つべからずといえどもそれ亦陶士行たらんか。それ本とする所は学のみ。勉めよや日孜、念へよや思父。是れを説となす(四六、安5・12・19)

この名字説のあと品川がどのように孜々として勉学したかは明らかではないが、松陰が十二月二十六日野山獄に赴く沿道での事を書いた中にいう。「屈強なる子遠・八十、駿発なる無逸、子楫の如き『先生行くか』といふに過ぎず。日孜少年は翻つて曰く『今よりまさに勉勵すべし』と。勉勵する所、果して如何なるやを語らずと雖も、要は非凡の語なり(四三)と。松陰の入獄を契機に勉勵しようというのである。呼出しをかけられた品川とは大きく変っている。これから一カ月後に書かれた「語子遠」にいう。「日孜事に臨みて驚かず、少年中希観の男子なり。吾屢々これを試る(四三)と。松陰の品川への信頼と期待は大きくなった。さらにこれから一カ月半後にいう。「吾さきに与子遠の語に『思父事に臨みて驚かず』と。今は品目を改めて『悪をにくむただ敵し』と。(中略)これを思文の真骨頭と謂ふ。乃ち得たり悪をにくむ、何を以てか之を真骨頭といふ。曰く是れ学問を仮らず師友を仮らず、生来の稟得資質なり。故にこれを真と謂ふ。学問は須らく己が真骨頭を求め得て然る後に工夫を著くべし(四三六、安6・3・12)と。学問の方法として自分の个性的本質を見出してこれから工夫をつけていくべきだとの発言は重要な意味をもつ。教える側からいえば教えられるものの個性本質を見出さねばならないということであり、それにもとづいての学問、教育が必要ということになる。先に松陰の教育の契機の転換を見たが、この頃は明らかに新しい立場に立っているということができよう。次にまたこの発言はもう一つ別の重要

な意味をもっている。それはこのような本質的な事をなぜ品川に語ったかということである。それは品川の誠実さと必ず松陰の言を実現すると信じたからに外ならない。品川の学問はこの時点においても特別にすぐれてもいなかった。だから作間、増野と品川をならべて杉蔵・久坂・高杉らに指導を依頼している。「彼らが輩(作間・増野・品川)三人は実に誠実、吾が輩に負むかず候(六三三、安6・3・16杉蔵宛)『それはさておき、弥二内輪へ必置の事につき、二子去る後色々案じたり。先づ弥二身上にていえば是等の事も皆玉成の質なり。この一事親に負くといふ事が心になれば、他の孝道必ず切なり。このむづかしき所を処し、慣れておかねば天下の難事は中々この段に非ず(六三三、安6・4・11久坂宛)また「弥二郎は大いに是れ有情の少年、愛すべし。愛すべし。小生杉蔵兄弟共に同志と大に隙を生じた時も終始一意、両獄を往来して万事周旋して今日に至るまで、書籍その外大氏かれが力にて読むことを得たり(中略)同志中少年頼むべきものは作間忠三郎と弥二郎なり。弥二郎極めて妙(六三三、安6・7・19高杉宛)と。三人の先輩たちの後輩への指導を依頼すると共に、この三人に対して「切徳勤学、志のくじけぬ様に、気の浮ばぬ様にこれあり度く候、古人の往事を思て負けぬ様に心がくべし(六三三、安6・3・17)と励ましている。いよいよ東送ときまった時も、戊午文稿、己未文稿の六巻を品川に届け密蔵して決して燃さぬように依頼している(四三三)。こうした信頼の中で、「思父は年わかし。能く我を敬するを知る。我こを以て深く思父を愛す。思父なすなくして死すとも、思父は我に幸くとをなさんや(七五四、安6・5・21)と東行前日記に書いている。これこそ絶大の信頼と期待である。

この頃品川はまた松陰から「康済録」を読むことをすすめられている(四三三、安6・4・28)。嘗つて松陰は兄梅太郎にもこの書を推薦している。「康済録を熟読仕り候所実に佳選なり。よりに思ふ、今民政

に携はる程の人にはこれ位は頓に腹に入り候や。読書人自ら手眼を出すべし。」(六三三、安6・2・1)と。若い時から松陰は兄に民政に心を尽していくことを期待し、その方面の知識を兄に知らせていたし兄梅太郎もその方に関心があり、明治に入ってから、藩主から民治の名を賜っている(二〇七)。弥二郎に対してもこの頃にはこうした方向に進むべきことを期待していたのかも知れない。これが契機で産業組合の設立へ働くこととなり、その功労者として知られるようになったのかも知れない。

松陰の刑死後は村塾にも足しげく通って勉学したことが「九俣日記」「江月齋日乗」に出ている。そして明治に名を残すこととなった。彼こそ松陰の信頼と期待の上に、その予言を実現した人物ということができよう。

野村和作(二一九)

野村の通称は和作、後の子爵野村靖で、兄は入江杉藏。安政四年十六才の冬松陰の門に入った。安政五年末、大原西下策で京都に入ったが捕えられた。翌六年伏見要駕策のために亡命したが、再び捕えられ岩倉獄に投ぜられた。獄中勉学に努め万延元年閏三月兄と共に放免された。その後松門の同志とともに勤皇運動に奔走し、文久二年の英国公使館の焼打にも参加した。文久三年正月松陰に従学し尊攘の正義を弁知し志行嘉すべきを以て士分に列せられた。明治元年には藩政に参与した。これより明治政府に加わり次第に要職についた。明治二十年子爵をうけ、四十年には富美宮泰宮内親王の御養育掛長ともなり、四十二年一月歿した。享年六十八、正二位勲一等に叙せられた。

野村和作が安政四年の冬に入門したというが、始めて松陰の文にあらわれたのは安政五年九月二十七日の京都の萩野への紹介状である。「和作と申すもの杉藏の弟にして才氣有り、頗る読書を好み候尤も年少軽銳の質に付時々御控制下され度く候」(六九七)というのがそれである。安政四年の冬からこの頃までどのような勉学をしていたか明らかではない。萩野への紹介状をもって行った時は京都の大原三位の長門

下向の画策に関連した時でもあったので、本人には次の注意を与えている。「百事精思して後行うべし。長者を凌忽し、人の疾悪を取る勿れ。汝の才氣なきを患へず、患ふる所はこの二事のみ。」(六九七)と。これから三か月あと、大原三位へ萩藩の人物を紹介した長文の手紙の中に、和作を紹介して「和作は年少心元なく候へ共亦鋭果愛すべき者に候」(六一五、安6・12・21)といい、「杉藏の弟の和作小年中の傑出」(六一六、安6・1・6)とも評している。野村和作の動きは時局と関係があるのでそれを示すと次のようになる。前半は安政五年、一月以降は安政六年である。

- 9・28 和作ら大原三位西下策のため上京
- 11・6 老中間部詮勝要撃策成り、松陰永訣の書を書く
- 12・5 投獄の命下る。八名の門人師の罪名を問いて奔走、そのため家囚
- 12・27 和作・伝之輔萩に帰り家囚となる
- 1・24 時事に憤慨して松陰午後より絶食
- 1・25 和作・入江・栄太・品川許されし故に松陰絶食を中止
- 1・27 「語子遠」で門人評を書く
- 2・24 要駕策に應ずるため和作をして脱走上京させる
- 2・28 杉藏・松陰に策応したかどにより岩倉獄に投ぜらる
- 3・5 藩主参勤交代で萩を出発
- 3・22 和作捕えられ岩倉獄に投ぜらる

(杉藏・和作の兄弟はこれから一年獄中生活を送る)

要駕策に應じて上京する和作に三十四字の短い送叙(四三三)を与えている。それには孟子公孫丑の北宮黜と孟施舍の二人の勇をあげ、恥ずかしめを受けたならば、相手がどのようであろうとも必ず復報するという勇氣の北宮黜を優れたものだといひ、それを心構えとすべきことをいっている。「語子遠」(四三三)には和作のことはのべていない。和作に才氣があるが長者を押しつけたたり人から憎まれる所のある事も見出し、北宮黜の勇をすすめているかその理由をどこから把握したか

は明らかではない。百万の敵の攻めにも懼れない勇よりも恥かしめという理智的な判断の上に立つ勇をすすめている所に意味がある。大原策での家囚を許されたあとには「和作事如何にも感心(中略)是より真実の学問せよかし、学事については往復すべし。かれこれ益あるなりとお伝へ下され度く候」(六三三、安6・2・2)と杉藏に依頼している。和作の実践的な面に期待しているのである。このあと三月から四月にかけて松陰は時事に憤激し自分の生死をかけて毛利藩の人々を刺戟しようとかかる。一方生死をかけて実践活動をした経験から、松陰の生死をかけての言動にきびしく食いついていった。ここで始めて松陰は和作の内面に深く立入っていくようになる。「足下年甫めて十八、班は則ち軽卒なれども飄然单身、策を決して東行す。事ならずして帰り囚せらるるとも天下の人長門に復た忠義の種子なしと謂ふを得ざらしむ。その冥々の功たる吾れ感激涕洟やむ能はざるなり」(四三三、安6・3・27)と。毛利藩の人々も門下も松陰の声に応じてくれない。和作・杉藏へ宛てた手紙の中で、思わず洩した一語が次のように書かれた。「長門ももはや致方なし。片時も生きてゐる事うるさく存じ候」(六三六、安6・3・26)と。これに対して和作は食い下つたらしい。そのことに松陰は次のように返事している。「片時もゐる事うるさく、この語の間に合候得ば赤面失言なり。併しながら平生の知己一人も知りてくれる人なく、一人尊攘してくれる人なく、実に些も楽しい事はないではないか。難儀な、齒がゆい。それ故ついこんな軽薄な言を吐いた。吾が心を恕し、吾が過を宥せ。已来は申す間じく候」(六三六、安6・4・4)このように十八才の和作に頭を下げた。和作も感動したことであろう。松陰の和作への信頼も期待も大きくなったであろうし、和作の松陰敬慕の心とともに、学問への心も深まったに違いない。松陰は和作につづけて手紙を出している。

「和作の読書の識は感心。(中略)一々評するに暇あらず(中略)通

鑑どうぞ読むべし。万巻の力吾往くとして和作に及ばず、寸鉄の利は吾亦乃兄に及ばず、兄弟の品格自ら殊なる。学問も相違あるべし」(六三六、安6・4・11)

「是よりは相共に精心刻苦して学問すべし。令兄僕の従来の自輕の失をいふ。此言感銘、自重せねば大事はならぬ。(中略)僕曾て此獄に居た時の稿お目に懸くべし。戊午(五年)の義卿とは別物なり。己未(六年)已後は又一物となりて見せよう」(六三三、安6・4・14)

こうした信頼に応えるべく獄中で懸命に勉学したに違いない。松陰の東送を知った時の和作の失意が次の手紙でよくわかると共にその中で松陰の志を継ぐことを誓っている。「嗚呼、先生の顔また拝するべからず。先生の言また聞き得べからず。僕愚生何を以て書に勝せん。伏して願くは、生死の地を訣別する事を以て一書を賜へ。謹みて骨髓に刻まん。涕顔払はず、遙かに野山獄を仰ぐ。亦憐れむべし(中略)二白、愚生といへども必ず読書勉勵し王事に死せん。反覆のお気遣はつかわされまじく候様ねがい上げ奉り候以上」(六三六、安6・5・15)この手紙は松陰を感動させたに違いない。思えば「語子遠」にも他の門下生に伍して人物評もしていないし、名字説も与えていない。この時期の松陰の心には和作の存在は大きかった。それに気付いた松陰は五月二十日、東行前日記に次のように書いている。

「和作は鋭敏果断なり。頗る阿兄を過ぐ。而して精思熟慮は少しく譲る。その資性異なりありと雖も、抑々学問経歴未だ足らず、今は獄に在りて書を読む、天祐これより大なるはなし。和作、後來まことに頼むべきなり」(七五三)と。在獄を天祐として勉学し、兄に劣ると見られる精思熟慮も、本人の努力によって兄を超えることもできよう。そして王事に尽すことも可能になる。今はただ勉学せよというわけである。

獄中であって勉学するには久坂がたよりである。久坂に宛ててい

う。「私もとより不才不智不学に御座候へば先達つてより熟思仕り候て、詩文章はまずしばらく打置き読書万巻、古今治乱を究講仕り、生死の機をよく処する様眼力をたしかに仕り度き存念、実に日夜精勵仕り候（中略）僕の死、僕の言、僕の明、皆諸君の欲るまま（中略）美食を投ずれば則美食を食ひ、糟粕を投ずれば糟粕を食ひ申すべく候弥二（品川）実によく周旋致しけれ申候（中略）松陰先生如何御座候はん。僕訴ふる所なし。私読書の心鉢も松陰先生にも未だ是非を伺ひ申さず候処、いかがこれあり候や、御叱正を乞ひ申し候」（六三三、安6・7・8）と。久坂は松陰の期待にそるべく和作の勉学に協力し、和作もそれに応えて勉学したに違いない。次の一文の中にもそれを察することができる。

明治十四年品川弥二郎が松陰の遺文を編みこれに和作即ち野村靖が序をつけた。その序にいう。「遂にここを以て（松陰が）殺さる。事二十年前にあり、余今に至りても一たびこれを思ふごとに未だ嘗つて悲憤大息歎嘘流涕せざるはなし」（四一七）

明治二十三年、要駕策稿本ができ、小田村後の楯取素彦が野村靖に序文をつけさせた。それにいう。「予先師の教を奉じて郷里を脱走し、特に公（毛利）の駕を伏見に要せんとす。事敗れて捕えらる。帰りて獄につながる。予再び先師と誓ふ。操志益々確かに事悉く決死の策に出ず、事態ここに移り、終に其志を遂げる能はず（中略）嗚呼、先師及び此巻に載する所の諸子、多く屠戮の刑に陥り、自ら以てその所を得たりと為す。而して予やただに首領を今日に保ち、聖代に遭遇し、其恩を承け、其賞を拜す。巻に對ひて黙念これを久しうす。」（二〇六四）

右の二文はいづれも伊藤博文の詩と比べて全く感慨が異っている。松陰の信頼と期待に応え、後來頼むべしの予言を実現しようとし、それを実現しえたものの感慨ということができよう。

五、信頼と期待に沿いえなかった人々

松陰に愛せられ信頼と期待をもたれながらも、遂にそれに応えられなかった人々もいる。それが何故であったかを明らかにすることも松陰の教育事実の考察には欠くことができない。

増野徳民（二〇三）

増野名は乾字は無咎。通称は徳民。周防山代の医家に天保十三年に生れた。安政三年十五才の時松陰の門に入った。松陰に最も早く教を受けた身内以外の人物である。松陰の入獄後は藩医岡田以伯に医術を学んだ。久坂・品川らと共に国事にも働いた。文久二年長井雅楽の暗殺計画に参加して捕えられた。周防山代に送られ父の厳禁にあい、遂に出ることかなはず山間の一医師として働いたが、常に同門の人々の活動を思い嫉しまず明治十年五月歿した。享年三十六。

増野の名は安政三年十月一日の「丙辰日記」（二〇三）に出ている。すなはち身内以外の塾生の第一号である。十五才であった。次に来たのが吉田栄太郎で、この二人は最も継続的に教をうけている。これは前述した所である。

安政四年八月、名字説乾字無咎説（三三二）をもらっている。この中にいう。「初め三生の余に従つて書を読むや各々長ずる所あり、栄太は才気鋭敏にして善く大事を論ず、而れども学を修むる事は懶る。吾故に之を責むるに無逸を以てす。松洞は画を善くし詩に工なり。別に志操を存すれども書を読むこと博からず、吾故に無窮を以てこれを勉めしむ。ひとり徳民は慎密に書を読み精苦人に絶す。一歳の間その鈔し且つ録する所、哀然数大冊をなす。而も務むる所家業を離れず、末技に拙せず、衆まさに喧騰叫罵して天下の大計を論ずれども徳民は退坐して燈を剔り屹々読抄す。衆倦み且つ臥すると雖も廢せず、而して事に臨むに當りては劇論抗議して未だ嘗て少しも屈せず。（中略）山代の地は窮山の間であり風教未だ甚しくは洽からず、學術未だ甚しくは隆からず、徳民の学をなして帰り、その間に首唱せんとす。其意密に

医薬の間に止らず、而してその事をして尽く謀る所の如くならしめば、これが阻碍となる者、群然として起らんこと知るべきなり。是の時に当り、力を致して而も効を求めず、己を責めて人を咎めず以て大成を期せ」(三三三) この文では医学を大成しそれによって地域の風教をおこすことを目的とし、己を責めて人を咎めずに大成を期せというのである。徳民の努力を認め、その方向づけを医術にしている。安政四年八月で、時局的には安定していたから、これでよかったのである。所が時局は次第に急になってくる。松陰の動きも大きくなる。

従って村塾に学ぶ徳民にも風当りが出て来たのである。「慙むべき所の者はひとり無咎にして、一度桑梓を省みれば家累百詰して脚を抜くこと特に艱からん」(三三四、安4・11・24) 山代から来ているので、塾に寄宿して勉強したらしく、家が隣の柴太郎と共に毎日松陰の指導をうけていた。安政五年に入っても「松下村塾食料月計」(三三九)、「松下村塾食事人名控」(三三九)に徳民の名が出ていて、寄宿していたものと考えることが出来る。安政五年は村塾の最盛期で、その名も藩内に知れていったに違いない。それと共に徳民の名が見えなくなる。安政四年にすら家累百詰しているのだから、安政五年には時折郷里(桑梓)に帰れば、家族から何かと言われたに違いない。名字説に見られるように一かどの意志強さもあつたし、安政四年九月折煙管事件で徳民も禁煙した一人だが、これが安政五年五月にも続いていた(三四四)ところからみれば、相当に意志のつよい人物であつたと想像できる。先の有吉・作問のようにそうした家庭からも脱出できたろうに、松陰は「脚を抜くこと特に艱からん」といつている。そしてこの秋には時折徳民の所在がわからなくなった。十二月の松陰の再入獄の罪名問題の時も徳民は入っていない。しかしその二十日には松陰を訪うているし、その入獄には獄まで見送っている(三四六)。

「政府只今の混雑に乗じ仙吉・徳民を亡命にて上せ急に大原卿を連

下り候はゞ手短き大奇計と覚候」(六一五、安5・12・29)として徳民を探したが、徳民は遂に獄を訪ねなかった。松陰は徳民が来なかったのは郷里に帰っているのだと知った。徳民が逃げていたのか帰るべき必然性があつたのか明らかではない。

安政六年一月には、徳民が萩に来ていたかどうか明らかではないが、松陰は徳民の所在を探していた(六一四、安6・1・7)(六一七、安6・1・12)。下旬には萩に帰ったのかも知れないが、次の一文がある。

「無咎足下、飄然山代の一医生として来り吾が社に入る。王事を周旋すること終始一節、奇男子なり。吾諸友の棄つる所となり、吾道非なり。(中略)足下吾より少きこと十余年なり。吾におかれて死すべし。足下幸にわが書を収めよ。厚く自ら淬励して奇男子を以て名医生となれ。足下今日の自分の職なり。痛恨々々」(六一四、安6・1・23)と。

これは絶食の一日前であるから松陰の最も焦慮している時である。徳民が所在を明らかにせずまた獄に來ないのは他の門下生と同じく絶交している形になっている。その形を見て、王事に奔走することよりも医師になることに徳民の意志があると見、名医になると共に松陰の遺文を集める仕事をしてくれというのである。それはそれで名字説の延長であつて筋の通ることであるが、それが何故「痛恨々々」なのか。全く前文でいっていることとは違う心理といわねばならない。他の塾生が天下国家を論じて大声をあげていても「屹々読抄」した徳民であるから、自分の職として医に進むよう努力すると同時にまた王事にも尽力すると信じているぞ、それを逃がっているのではないか、それが痛恨だといっているのである。建前では名医になることだが、本音は徳民に身を捨てて王事に尽して欲しかった。安政六年二月の要駕策では徳民もその実行者として候補の一人だった(六一三)。しかし結局和作しか実行に移らなかつた。二月二十四日の和作の脱走、それに伴う杉蔵の投獄となつた。増野には作問・品川と共に和作・杉蔵の母を安堵

させるよう工夫せよと指示している(六三三)。この時徳民は十八才で、作間・品川は十七才である。そしてこれからあと、いつも三人が連名になっている。

「子大無咎は思父と三人相信ず、けだし相売らざらん、惜しむらくは才力单薄にして未だ吾が志を終ふるに足らざらん」(六三四、安6・3・12 杉蔵宛)

「(和作の事) 何分當月中は深秘せねばならぬなり。三人沈黙して心術を練る事干要干要」(六三三、安6・3・14 作間・徳民・品川の三人宛)

「彼輩三人実に誠実、吾輩に負まかす候」(六三五、安6・3・16 杉蔵宛)

「三人切徳勤学、志の挫けぬ様に気の浮ばぬ様にこれあり度く候」(六三五、安6・3・17 徳民宛)

「ひとり子大・無咎・思父は穉弱にしてなすある能はず、能はずと雖も心これを是とす」(六三六、安6・3・19 要駕策主意、下)

徳民は年下の作間・品川といつても並らべられ、時には「この事子大、日孜へ談じてみよ、なんといふか」(六三六、安6春、徳民宛)と取扱われることもあり気になることであつたらう。高杉にも三人ならべて指導を依頼している。「徳民・作間兩人弥次と全く同意、この三人少年と雖も恃むべし」(六三六、安6・5・13)と。杉蔵に対しても処刑直前に依頼している。「作間・弥二・徳民などの事甚だ懸念なり。この三人は決して変ぜぬに相違はなしと存じ候」(六四四、安6・10・20)と。

なにが松陰にこれほど懸念をかけたか、問題は徳民にあつたと考えられる。三人とも満家俗論の中にあつたけれども、既述のように作間・品川は俗論の中から脱出していた。徳民が不安定であつたことは前述の如くである。このあたりの松陰の心中では名医になることより王事に尽す徳民を描き期待していたのであろうが、徳民の心は分裂し迷っていたのではあるまいか。

松陰東送後は徳民は藩医岡田以伯に医を学ぶと共に、「九俣日記」

「江月斎日乗」にあるように村塾に出入して久坂の指導をうけていた。だが文久元年の「一燈銭申合」には徳民の名はない。しかしこの年から始つた長井雅楽の公武合体論の反対派に参加し、その暗殺を計画したが失敗し捕えられて山代に送還された。そして父の厳しい禁止にあつて遂に世に出ることができなかった。いつも並らべられた三人のうち品川と作間は元治元年の禁門の変に参加作間は戦死、品川は逃げて帰った。松陰の期待に沿ひ得なかつた徳民の精神的苦悩は大きかつたに違いない。だが松陰の分裂した指導にも原因の一端があつたといわざるをえない。なぜなら久坂も藩医の家を継ぐべきだったが松陰はこの方向に進むことを久坂に一度も言っていないのであるから。三十六才の若さで世を去つたのもこの精神的苦痛にその一因があつたかも知れない。

岡部富太郎(二二二)

岡部名は利濟字は子楨、巨川と号した。通称は富太郎。天保十一年秋に生れた。藩士岡部藤吾の嫡子で来原良蔵の甥になる。幼より良蔵や土屋蕭海に学び後に明倫館に学ぶ。安政四年松陰の門に入った。安政五年末の松陰再入獄の罪名問題に奔走した一人。文久元年十二月の「一燈銭申合」にも参加した。その後藩軍の長として活躍した。明治元年には北越へ干城隊の中隊司令官として転戦し功をあげた。維新政府にも入つたが、明治七年の佐賀の乱に兵を用いず鎮定せんことを主張して投獄された。後ゆるされて山口・大阪・兵庫などに在官した。明治二十八年歿、享年五十六。

岡部の名が始めて出たのは安政四年十一月二十日である。伊沙イッサブ菩諭言を読みこれを岡部に写させたという一件であつて、岡部の人物とは関わりはない(二三三)。この頃十五才以下の塾生もいて、松陰の眼についている人物として弥二・馬島・妻木・国司・飯田らがいて、彼らの「寝々進益」(二三三)ということで名が出てくるが、十八才の岡部はあがつていない。安政五年二月になって塾生で撃剣のできるの三人として、その中に岡部があがつて来ている。その五月に松陰から岡

部に示した詩が一篇ある。

何物増人智 天下無如書 読書不増智 何若鋤園蔬
 国家今日士有用 岡生汝勿甘散樗 (三四六)

智を増すのは書物ではなくて園蔬を耕すことだという松陰の真意は何であつたらうか。そして汝は世間無用の人間になる勿れというのは何故だろうか。何か富太郎のあり方に関わっていると考えられるがわからない。六月になると、久坂宛の手紙の中に「来原の姪岡部は兄の品鑑の如し(中略) 近来の勉強家は岡部の外有吉(六四三)とある。又「佐々謙・提山・岡部富太郎など少しく奮励(六四四)といわれている所をみるとこの頃は勉強していたらしい。その八月には来原良蔵の長崎行に従って岡部も行けるかも知れないとき、詩二篇を贈っている。その一つにいう。

吾觀今世人 虎皮而羊質 此行皆精銳
 洋陣志三穀率一 岡生汝有才 切勿三自暇逸一
 材技何足言 勤王期三第一(三四三)

岡部の才は認めるがその方向を誤るなど示唆している。結局岡部は長崎には行けなかった。そしてこの八月に兵学入門の起請文に記入している(九五〇)。

十二月の松陰再入獄の罪名問題の時にも奔走し家囚となった。この時詩を作った。それを松陰は記録していた(九五〇)。

聞説君公憂国深 孤凶慷慨泣淋々
 忠魂誓欲除姦賊 即是微臣鉄石心

いかにも才人らしい一面がよくわかる。松陰は「子楨子徳子大説」(四一六、安五・12・11)を作って子楨について次のように述べている。

「岡部は才有り。それを以て之を期す。然れども天下は恃むべきが如くして恃むに足らざる者才より甚だしきものはなし。才ありて実な

きは譬ふれば漏舟敗楫の如し、徒に用ふるに適せざるに非ず、併せて人を誤り事を誤らんとするなり。まことに惧るべきなり。岡部居は大川にほとりす。故に別に巨川と字す。以て今日の艱難かくの如きを志す。それ惧れ慎しましむるなり」(四一六、安五・12・1)と。またいう。

「子楨は鋭邁俊爽なり。然れども吾常にその退転を惧る。退転の勢一旦ぎざすことあらば、駟馬もこれに及ばず、吾平生最も愛する所は子楨、無逸なり。無逸は吾その才の敏なるを愛し、子楨は吾その気の鋭なるを愛す。(中略)子楨はその頑なし。然れども氣自ら恃むべし。且つ子楨は母賢に弟友なり。以て家を託するに足る。是れ宜しく責むるに国事を以てすべきなり。是れ吾が心赤の語なり。汝切に記せよ」(四一四、安六・1・27)と。岡部の才は認めるがその方向や実の伴わないことに心配がある。また突然退転するようもあるさがある。その一方鋭気をもっているから、それによって国事に尽せと警告している。

子楨にはこの外、「口舌喋々」(四一六、六三三)の欠点、酒を飲みすぎる欠点(六三三)があり、他人からは駕馭されやすい(六三三)という性格でもある。松陰は子楨は好きな人物だったが、どうも口が禍ひし、和作の要駕策一件にも松陰の意志に反する言動をし、松陰は怒っている(六三三、安六・3・26)(六三三、安六・3・末)。しかし松陰は彼を捨て去ることはできなかった。然し最後まで信頼できる程の人物ではなかった。東送に当たっても「東行前日記」の中で二度も注意を書いている。

「君の質は素絹の如し。朱墨の色を受けやすし。君の性は喬木の如く繩に従へば自然に直なり。知るや君の畢生の事、尤も朋友の力を得、この間人なきに非ず、切劇して君国に報ぜよ」(七五八、安六・5・17)

「僕の足下における交情自ら諸友より深し(中略)足下奮励し能く自ら師友を得よ。然らざれば滔々として下流に趨らん。慮るべきな

り。子遠・佐世はよく足下を知る者、これに親しみこれを愛せよ」(七五八、安6・5・25)

このように心配した岡部であったが、江戸の松陰は唯一度高杉に「岡部富太郎亦用ふるに足る、輕佻を以て是を捨つるは偏なり」(六三三、安6・10・7)と、高杉の指導を求めている。このあとは岡部のことは言われていない。

松陰の東送後、久坂らに従って村塾で勉強していることは「九似日記」(「江月齋日乗」)に出ているが、この中で岡部が蘭語を学ぶか漢学をやるかに迷っているところが描かれている。而もその熱意の点についても疑問がもたれている。翌万延元年には病気になる(六四三)。このあたり松陰の指摘した「下流に趨る」心配がでてきたのではなからうか。略伝にもあるように幕末に活躍し維新政府にも入ったが、投獄されるような事もあった。その後官途にもついたから、一概に松陰の期待に沿いえなかったとはいえないが、松陰の文章に現われる子楨はもっと大成して良かったように思われる。明治十二年頃に彼の履歴書に「松下村塾の諸士いよいよ奮励練磨、士気を鼓舞し皇綱を維持し、先生の教に背かざらんことを期す。いくばくもなくして疾にかかり、専ら尽くすこと能はず、疾にある事殆ど三年」(二〇六三)といている。松陰の最後の心配からして大成し得なかったということも肯うことが出来るし、三年の病氣といっている所もまた彼が大成しえぬことへ自己弁護をしているようにも見る事ができよう。

福原又四郎(二〇三〇)

福原名は利実字は去華、通称又四郎。長藩士来原良蔵の甥、安政五年に松陰の門に入った。「兵学入門起請文」(九一五〇)に名が出ている。作間・岡部・天野らとはほぼ同じ時期である。しかし彼の生年や年令歿年もわからない。安政五年末の松陰再入獄についての罪名問題に参加奔走して家囚となった。松陰の東送後は久坂らの指導をうけ、文久元年の「一燈銭申合」にも参加している。万延元年藩命

で海軍運用科に入った。文久三年の賀茂社行幸の警衛員にも入っていたが、その後のことについては明らかでない。

松陰の文献に始めて現われるのは、安政五年十一月に岡部と共に来原について長崎に行くという事があった時である(六一三)。勿論岡部と共に長崎には行けなかったが。そして松陰罪名問題に奔走しているから、安政五年の後半は松陰について勉強していたと想像できるが、どのような勉強であったかは明らかではない。福原もまた作間と同じく身辺は俗論であつたらしい(六一四、安5・12・11)そして松陰の焦慮が始った五年の末には「佐世・岡部・福原などの良友も皆々謝絶の外致し方なく」(六一三)というほどで佐世・岡部と同列に考えられていた。

安政六年一月の「語子遠」では「福原は外優柔に似て而も智を以て之に足す。子楨の鋭氣愛すべきに如かず、然れどもその頑固自らはとする処は子楨も及ばざるなり」(六一五)と評せられている。福原のどういう事実からこの評が出て来たかはわからない。

昭和五十三年私が萩を訪れた時、土地の郷土史家の話では、明治末年頃まで生きてをり、名を又市と変え、町役場に勤めていたという。仕事もあまりしないで、煙管をくわえ、時の政府高官の伊藤・品川・山縣らを敬称なしで話題にして威張っていたという。これを松陰の人物評を重ねるとよく合うように考えられる。松陰は東送に当って、名字説「利実字去華略説」を作って与えた。「名は利実字を去華とは何の説ぞや。曰く是れ弊を矯むるの言なり。当今華ありて実なき、比々として皆是なり。故に去華といいてこれを醒すなり。又四の人物たる沈重簡黙、自らよく華を去りて実に就く者なり。故にこの名字最も当る。其説猶曲折あり。今特に之を略言す」(七五七、安6・5・16)と。

其説猶曲折ありとは略説とした意味もあろうが、もっと直言したい事があつたのであろう。久坂の「九似日記」をみると福原は岡部と共に漢学をやるか蘭学をやるかで迷っている。他人の言で右往左往に迷ふ

二人を久坂は笑っている(二〇四)。二人の迷いと他人に左右されることを久坂がその日記に書いていることからみても二人に対する久坂の評価もわかる。松陰は「外優柔に似て」といったが、久坂の方からは雷同性に見えたものと考えられる。去華は幣を矯むるの言と松陰は言ったが、外面を飾って附和雷同する所を指摘しているのではあるまいか。再入獄の罪名問題の八人の一人であり、後の公武合体論で久坂らと共に長井を刺殺しようとしたことがあるが、それは福原の雷同的行動であったのではなからうか。「沈重簡黙」を保ち「自ら華を去りて実に就く」ことむしろ福原の進むべき松陰の示唆であり方向づけであったと見るべきである。しかし福原はそれを実現出来ず、大成しえなかつたといふことができる。

佐世八十郎(二〇一五)

佐世名は一誠、字は子明、通称八十郎で、後の前原一誠である。慶応元年前原姓になる。天保五年三月秋に生れた。藩士彦七の長男で天保十年父と共に船木に移り住んだ。十三才で萩に出で数年福原冬嶺に学んだ。安政四年十月松陰の門に入った。安政五年の末の松陰再入獄の罪名問題で奔走した一人で、彼も亦家因となった。松陰の東送前後は藩命により長崎に遊学していた。文久元年の「一燈銭申合」にも参加していた。久坂・中谷らと共に行動し、慶応三年には藩の海軍頭取を命ぜられるに至った。明治元年には干城隊の副総督として北越に戦い、次第に要職につき、明治二年七月には参議に任じ従四位に叙せられた。十二月兵部大輔となり、大いに陸海軍制の確立に尽力した。しかし政府部内で意見があわず、三年九月病と称して職を辞して帰国した。この頃より事実前原は病臥する日が多かつたが、次第に新政府の施政方針に不満を抱き、木戸・井上・伊藤・品川らの嘗つての友人たちの勧告と幹旋にもかかわらず、西洋模倣的改革の政府の方針に反対し、闕下に忠奏するを名として明治九年十月兵を萩にあげた。事敗れ逃亡したが捕えられ、十二月三日斬に処せられた。享年四十三、この乱により父彦七は自刃し、松陰歿後の松下村塾を経営していた玉木文之進はその門下の中から数名の乱への参加者が出たということで、今迄の教育に誤りがあったとして自刃した

(二〇二〇)。六十七才。前原は明治二十二年賊名を赦され、大正五年には従四位が贈られた。

佐世八十郎の名が初めて松陰の文献にあらわれたのは安政四年十一月十二日で、政記を読んでいる(三三三〇)(三三三〇)。「兵学入門起請文」(三三三三)にはその名がない。この年の佐世は二十四才で、塾生としては年長者である。佐世の家が近いということで友人羽徳祐の指導を依頼し、人物を次のように評価している。「この頃佐世八十郎来たり留遊すること十日、ともに頼氏政記一部を読む。かれ反復甚だよろこぶ。この子志あり気あり。春秋又富む。その才学の如きは今いふべきものあるを見ずと雖もその前途必ず成すあらん」(三三三三、安4・11・12)と。

入門直後にその前途必ず成すあらんという信頼と期待がどこからでたのか明らかではない。しかしその翌月十二月十六日に、久保・杉蔵・佐世と松陰との四人で密策を打合せたので獄に来るように(三三三三)と佐世に働きかけ、また大原三位宛の文書には佐世は長州藩の一番士で密議の出来る人物だとも紹介している(三三三三、安5・12・21)。そしてその翌日には「生死離合、人事は倏忽たり。ただ奪いえざるものは志、滅せざるものは業なり。天地の間恃むべきものはひとり是のみ、吾、公を見ずして獄に投ぜらる。獄脱すべからず。公も吾を見るを得ず、志業の天地に寓る吾と公とまさに務むべきのみ」(四一七)と。

然し佐世は松陰の呼びかけに応じて獄には行かなかつた。「昨夕図らずも桂・岡部・杉蔵来会す、近来の一快。老兄(佐世)なきを以て恨みとなす」(三三三三、安5・12・25)と松陰は佐世に書を送った。佐世は返事している。「夜前は心ならずも二言申上げ多罪。謝するところを知らず(中略)愚父義このうち已来世上より吠えすくめられ申候(中略)愚父の義志は変ぜず候えども議論は大いに反し居り申候(中略)愚父の言葉も子を思ふ悲心より出で候事故、一まず押しこらえ申候(中略)夜前の心事は実に筆に得つくし申さず、御憐察願ひ奉り候」

(六二五、安5・12・26) 松陰再入獄の罪名問題で家囚されている時だから親の抑止は止むを得ない。同日松陰は獄に赴くに際して三つの詩を作っている(三三三)。

留題村塾壁

宝祚隆天壤 千秋同其貫 何如今世運

大道属糜爛 今我岸獄投 諸友半及難

世事不可言 此孝旋可觀 東林振季明

太学持袁漢 松下雖陋村 誓為三神国幹

これは有名な詩であるがもう二篇は子遠と佐世にそれぞれ与えた詩である。佐世に対して

吾人報国志 滿世人不知 雖則人不知

蒼天將憐之 (中略) 佐世同志士

吾故寄此辞

と。佐世を同志と呼び、この頃最も信頼した杉蔵と同じ位置で信頼感を示している。佐世は松陰の入獄をその途に見送っている(六二六)。

「語子遠」の中で松陰は佐世を次のようにいう。「八十は勇あり智あり。誠実人に過ぐ、いわゆる布帛粟米にして適くとして用いられざるなし。其才は実甫に及ばず、其識は暢夫に及ばず。而してその人物は完全なり。二子も亦八十に及ばざる事遠し(中略) 八十父母に事へて極めて孝なり。余未だ責むるに国事を以てせず(四二四)と。そしてこの前日に義弟小田村に与えた手紙の中で「岡部は長弟あり、故に頗るこれを責む。佐世に至っては亦父母あれば陽には責むべからず。(中略) 而して佐世に不平の言あり。良藏常に云ふ。義卿は人に強ふるの病あり」と(六二六)。松陰は人に強いと弁護(六二七)してはいるが、やはり言外には国事につくせといっているのであり、二月九日には佐世に与えていっている。「御終身忠孝の目的」と大書し、行をかえて「吾藩当今の模様を察するに在官在禄にては逆ても真忠真孝は出

来申さず、尋常の忠孝の積りなれば可なり、真忠孝に志あらば一度は亡命して草莽崛起を謀らねば行け申さず候」(六二九)と。この日佐世に長崎への留学の命が下った。佐世は松陰の示唆に従って忠をとるか、藩の命に従って長崎へ行くという孝をとるか迷っているのである。その迷いを聞いて松陰は更に佐世へ手紙を書いている。「足下忠臣たらんと欲すれば忠臣、孝子たらんと欲すれば孝子。節義たらんと欲すれば則節義、功業をなさんと欲すれば則ち功業。素絲未だ染まらず、大路岐れあり。黄黒と左右と。足下の方寸にあるのみ」(四二四)と。佐世の方寸にあるとはいうが、前文に見られるように松陰の本心ははっきりしている。「二子(杉蔵と子楫)及び佐世は弟に家事を託し一身を丸で勤王にゆだねべき身上と拙生は覚え候」(六二六、安6・2)とも岡部宛に手紙を書いていることから明らかである。こうした松陰の気持は佐世にも伝わっていない筈はない。佐世も苦しんだ。この様を見て久坂は松陰へ「佐世八十亦進退これきわまる。東すれば則君父に背き、西すれば則ち先生に違ふ。ここに於てか窮死せんと欲することしばしばなり」(六三三)と伝えた。これに対して松陰はいう。「君父に負かしむる師友、師友とすべけんや。人の師友に貴ぶ所は忠孝の大事を了せんとするなり。佐世の心事実に右の通りならば、僕へ絶交さへすれば相済むことなり」(六三三)と。佐世に対しては「いづこにか功を建つべからざらん。何の時にか事を成すべからざらん。御勉強專一に存じ奉り候。小生事は爾後必ず御相手に成し下されまじく候。人々各々力を竭すが忠なり」(六三三)と、いってやった。これらの往復は二月二十三日から二十四日にかけての事であり一方二十四日は野村和作が要駕策に應ずるために脱走した日である。

二月二十四日に脱走した和作の一件が発覚した。この発覚の原因は佐世がうかつに岡部に、岡部は小田村にこれを語った。驚いた小田村から当路に知らされた事で、杉蔵が捕えられ、和作への追手がかかっ

た。このことを佐世は長崎で知った。その謝罪の手紙を松陰に出した(六三二、安6・4・12)。松陰はこれに詩を加えて入牢中の杉蔵、和作に送っている(六三三、安6・4・23)。これに対して杉蔵は佐世を批評している。「佐君実厚余りあり。而して才氣足らず、故に事に臨みて多く滞る。然りと雖も終に義には背かず、杉蔵万々及ばずと雖もその質は則ち自ら略々似たりとなす。如何如何」(六三三)と、満家俗論の中にあって高杉・有吉・作間・品川・増野らがその抵抗を排しつつ松下村塾に出入していた。佐世も俗論を排して東すると見たが九州へ行ってしまった。松陰からは建前上、佐世を非難はできなかった。松陰は佐世を勇あり智あり、誠実人に過ぎるといったが才は実甫に、識は暢夫に及ばずといった。この時の才には否定的な意味はふくんでいない。しかし杉蔵の佐世を評した「才氣足らず、故に事に臨みて多く滞る」には否定の意味をふくんでいる。佐世は明治政府に入り重用されたが、意見が合わず帰郷し結局萩の乱を起して斬にあった。事柄自体は松陰の予想を超えることであつたが、この動き自体は松陰の佐世への期待に反することであつたといわざるを得ない。佐世の誠実さが乱を起す原因になつたとも考えられるし、才氣が足らなかつたことが、事の見通しと打つ手の滞りとなつて失敗したとも考えられる。嘗つて佐世も杉蔵も次のように注意されている。それに対してこの二人の行き方の違いはどこから生じたのであろうか。

「足下(杉蔵)と佐世は飲酒は禁じ難し(是は一策を得たる人達たかなればなり)さりながら、とくと史記の刺客伝を讀みてみよ。荆軻名を好み命を惜しみ酒婦人に耽るを以て、大事を遂げえず、甚だ不満な男なり。(中略)足下も佐世も酒婦人を以て愉快を助くる事は必ずやめてくれたまへ」(六三六、安6・2・15)と。

佐世が村塾でどのような勉学を行い、どのように信頼を得ていったかは明らかではない。二十四才の年長者であり、すでに三人の師にも

ついていたので基礎教養を松陰に学ぶ必要はなかつたであろう。恐らくは久坂や杉蔵その他の年長者との討論学習であつたろう。こうした中で松陰が佐世の才氣を称揚をしている所はない。松陰の期待に反して長崎へ行ったことなどを勘案すると杉蔵のいうように「事に臨みて滞る」という面が問題であつたともいえる。佐世八十郎すなはち前原一誠は一時参議にまで上つたのであるから、松陰の信頼や期待に全面に沿いえなかつたとは言えないかも知れないが、松陰のいう久坂にも高杉にも優る佐世の誠実さがその最後を全うするように働かなかつたことは、かの激しい時勢を乗り切ることには何か足らないということであつたかも知れないし、事に臨んで滞る所を見抜いて松陰が佐世に痛棒を与ええなかつたことに関わることもかも知れない。

六、その他の人々

今迄のべて来たことでわかるように、松陰の教育には明倫館における兵学教育、野山獄での獄中教育、松下村塾における教育との三つに分けることができる。「門下生」という時には村塾での教え子たちに限定了方がよいと思う。本稿で今迄とりあげた人たちはその一部分であつて、この外にも門下生がいた。松陰全集第十巻の関係人物略伝(二〇八七)の中にはまだ次の人々が載っている。これらの人々は松陰の文稿や書簡に出現することが少く、松陰の教育像を文稿や書簡によつて見ようとすると私の方法からは明らかにしがたいので割愛した。しかし私の論述が私の論述に都合のよいものだけを拾つたというものではないことを示すために、その大要を次に示そうと思う。

市之進(二〇一〇)

伊藤伝之助(二〇一〇)

略伝にも門下生となつた確証はないといっているが、村塾には出入していたらしい。慶応以後のことはわからない。

大谷茂樹 (二〇一三)

安政五年四月頃松門に入ったらしい。慶応元年藩内斗争で恭順派のために切腹させられた。

岡 仙吉 (二〇一五)

安政五年松下村塾にいたが、その後不明。

岡田耕作 (二〇一五)

安政四年九才で幽室に来て学んだ。安政六年以後のことはわからない。

岡部繁之助 (二〇一六)

岡部富太郎の弟、安政三年に兵学入門し十二月頃から幽室で学んでいる。松陰死後松門と交わり、文久二年の松陰慰霊祭にも参加している。元治元年藩の世子の近侍となる。維新後明治政府に入り正七位。大正八年歿、七十八。

尾寺新之丞 (二〇一三)

嘉永六年五月兵学、安政四年後半村塾に学び約一年間在塾したらしい。後江戸に出、松陰の遺骸埋葬に尽力した。維新後伊勢神宮に奉仕した。

音三郎 (二〇一三)

小野為八 (二〇一三)

安政五年村塾に学んだ。神道黒住教の神官となる。明治四十年歿、八十九。

河北義次郎 (二〇一六)

安政五年十六才で門人になった。明治政府に入り外交官になった。最後は韓国弁理公使、従四位、韓国で歿、四十八。

岸田多門 (二〇一三)

安政四年十四才で幽室に教をうけた。十一月に村塾成った頃、冷泉と共に寄宿した。同五年十一月までいたがその後不明。

木梨平之進 (二〇一三)

安政五年六月在塾寄宿していたがその後不明。

許道 (二〇一四)

安政四年九月頃在塾。その後不明。

国司仙吉 (二〇一四)

安政三年には幽室、四年からは村塾で学ぶ。その後明治政府に入り秋田県令になる。正五位。その後のこと不明。

溝三郎 (二〇一四)

駒井政五郎 (二〇一四)

安政四年十一月頃村塾にいた。明治に隊長として各地に転戦したが、北海道の戦で戦死。享年二十九才。正五位。

斎藤栄蔵 (二〇一五)

後に境二郎。斎藤については作文による教育のところまで深く関わって検討した。文久元年に世子の近侍となり後、明治政府に入り島根県令になった。正五位。晩年は村塾の保存に尽力した。

佐々木亀之助 (二〇一五)

佐々木謙蔵 (二〇一五)

佐々木梅三郎 (二〇一五)

佐々木三兄弟の家が松陰の家になかったために早くより機会あるごとに教をうけた。三兄弟共国事につくし、明治二十一年頃亀之助と梅三郎は北海道に入植している。八十才頃まで生存していたというが、どこに入ったかは明らかでない。二男の謙蔵については明治以後のことはわからない。

杉山松介 (二〇一五)

安政五年には村塾にをり、松陰の間部要撃策にも加っている。「語子遠」で「松介の才」と書いている。後国事に奔走し、栄太郎・寺島らと行動し、京都池田屋で新撰組に殺されている。二十七、従四位。

高須滝之允 (二〇一五)

幽室時代に教えをうけている。国事に働く中で、石見濱田の輸送船業務で溺死している。

滝弥太郎 (二〇一五)

安政五年十六才で入門。後岡山地方裁判所長になっている。従五位。

妻木寿之進 (二〇一六)

安政三年十一才より松陰に学んだ。維新後岡山県の書記官を務めた。従五位。

提山（松本県）（一〇一八三）

萩東光寺の小僧。安政四年から松陰に学んだ。後還俗して松本を名乗った。禁門の変に参加傷ついたが逃れた。明治政府に入り熊本・和歌山の県令になり、後元老院議員、貴族院議員にもなった。男爵、明治四十年歿、享年六十九。

中村理三郎（一〇一九六）

安政四年の秋十三才で入門、その後のことは不明。

原田太郎（一〇二〇〇）

安政五年在塾していたらしいが不明。

弘 忠貞（一〇二〇七）

安政五年在塾。後久坂らと行動を共にし、禁門の変で戦死。享年二十八、正五位。

藤野荒次郎（一〇二二二）

安政四年九月在塾、その後不明。

馬島春海（一〇二二〇）

安政四年末、十六才で入門。その後国事に奔走し晩年は漢学塾で教えた。明治三十八年歿。六十六。

馬島甫仙（一〇二二〇）

医家の出身。安政四年十四才で入門。読書極めて敏で、「塾中第一流」と松陰に愛せられた、松陰歿後「一燈銭申合」にも参加、奇兵隊に入り働いた。慶応元年より村塾で教えると共に遺稿の整理に当った。明治三年熱病にかかり発狂して死す。二十八。

山田市之允（一〇二四一）

安政五年十五才で入門。「一燈銭申合」にも参加、明治政府に入り、明治二年兵部大丞となり、後岩倉について欧米をまわり、西南の役にも活躍した。後司法卿になり、貴族院議員、枢密顧問官となった。正二位勲一等、明治二十五年歿、享年四十九。

山根孝仲（一〇二四四）

安政五年在塾。しかしあと不明。

山根武次郎（一〇二四四）

安政五年頃在塾。しかしあと不明。

横山重五郎（一〇二四四）

安政四年十七才で松門に入った。後明倫館の教授となった。明治初年には福井県の学務課長、従六位、明治三十九年歿、六十六。

冷泉雅次郎（天野御民）（一〇二五三）

安政四年十七才で入門。岸田多門と共に寄宿。明治政府に入り司法官となる。晩年山口に退隠し、明治三十六年歿、享年六十三。「松下村塾零話」外いくつかの著述がある。

以上の中で追記したいのは第一に岡田耕作第二は市之進・音三郎・溝三郎の三不良少年で、これらの人々と松陰の教育とのかかわりである。

岡田耕作は略伝にもあるように九才で村塾に来て学んでいた。翌十才の正月二日に、塾に学習に来た。松陰はその志をほめて次のように書いて与えた。「三元の日、来たり礼を修むる者あれども、未だ来りて業を請ふ者を見ず（中略）今耕作至る。群童に魁となる。群重に魁くるは乃ち天下に魁くるの始なり。耕作年甫めて十齡、厚く自ら激厲せよ。その前途寧ぞ測るべけんや。書して以てこれを励ます」（四九）さらにその年の端午の五月五日にもやって来た。そこで更に次の一書を与えた。「今世佳節令辰、慶を称し賀を称す（中略）百事皆廃す（中略）長者の風あるなし。童兒中長者の風ある者はそれ唯耕作なるか。耕作歳正月二日冊を挟みて業を請ふ。余己に文を作りてこれを譽む。今端午の日、亦来たりて書を読む。故に重ねて書してこれを与ふ」（四四〇）この耕作が平常どのような勉学をしていたかは明らかではないが、松陰はある種の期待をもったといえよう。「東行前日記」の五月十八日の項に岡田耕作の父以伯が獄を訪れている事が記されている。謝辞と

別れとであつたらうが、その二十一日の項に「岡田耕作に留別す」として

奇童田耕作 忽_レ慙_二汗血駒_一

期汝十年後 堂々一丈夫 (七五四)

と詩を贈っている。このように激励の一詩を贈るのは父親の依頼があつたような気がする。そして正月と端午の来塾も父親の示唆が入つていたような気がする。即ち松陰は耕作に一応の信頼と期待は示しているがその自発性が本人の内から出ていないことを知っていたのではあるまいか。たとい十才十一才であろうとも、これだけの信頼と期待があればそのあとの動きが残つてよいものと考えられるが何も残っていないから私はそのように推測する。

次は音三郎・市之進・溝三郎の三人の不良少年との関わりである。ともに吉田栄太郎が江戸に行くに際してこの三人の教育を松陰に依頼したのである。松陰はこの三人にそれぞれ一文を贈つて激励している。

音三郎に対しては「(大野) 楨介の遺孤なり。楨介は吾に半面なし。(中略) 昨無逸尔を拉し至る。容止温詳、一見して心ゆるす。尔年已に十七。未だ成立する所あらず。以て南すべく以て北すべく、以て黄にすべく以て黒にすべく、正に今日に在り。他人をして悲泣を絲岐に発せしむる勿れ」(三三三、安4・8・18)と。幸に父の遺書があるのだから、それにもとづき努力せよと教えた。

市之進に対しては、「一日市之進余の側にありて凡に凭れて書を学ぶ。余命ずるに掃掃の事を以てす。市已に諾し書を学びて止めず。余再びこれを言ふ。市云ふ『心十葉を写完せんことを期す、而して二葉未だ完せず。完し尽して然る後に事に従はん』と。余之に言ふこと三四たび。市猶はやめず。余黙然蹶起してその紙筆を奪ひ之を地に投ず。市収め取り、復た二字を写す。然る後に起ちて余の命に趨く。事

卒る。余市を進めて謂ひて曰く、『尔、余に抗せんと欲せしか。』市曰く『敢えてせず。』『敢えてせざれば何ぞ吾が命に趨くの緩なるか』市首を俛すること久し。吾徐ろに曰く『尔妙年穎脱、ともに道に入るべし。屈せず退かず、尔真心是のみ』と。市曰く『然』余曰く『聞く汝父を喪ひ母に事へて恭ならず。居処不敬、親戚隣里規責従はず。尔子弟の事も為す能はず、安ぞ天下の人に抗せんや、苟も天下の人に抗せんと欲せば、吾に一説あり。今より志を立て天に^{のぼ}り地に入り水を踏み火に投ずる人言のせしむる所、死と雖も屈せず、難と雖も退かず、是く屈せず退かざれば尔の真心を行うに足らん。何ぞ天下の人抗するに足らん』市奮然曰く『願くば先生の命是れ聴かんと。市年十四、頑凶無頼、頗る親戚の患ふる所となる。(中略) 余一見してこれを異とす。今果して凡兒に非ず。是に於て余、市と約して曰く、今後三十日にして前言を以て踐と為せ。三十日後、吾將に語るところあらん』(三三六、安4・8・19)と。松陰が市之進の異を発見し、それに期待した姿がよくわかる。

溝三郎に対しては「無逸三生を拉し余に造り託をなす。(中略) 末座の一生、商家の遊惰なり。年甫めて十四、頗る市井の気あり。余心にこれを厭ふ。(中略) 一夜読訖はるや、末座生進みて曰く、僕商をやめて医と為らん、如何と。余曰く、医となりて何をかなすと。曰く、商となるを樂しまずと。商となる、何すれぞ樂しまざる。曰く富貴の人に諂屈する能はずと。余曰く諂せず屈せざれば医もまた不可、今の医の諂屈は商より甚し。(中略) 尔、諂せず屈せざれば天下を更むることも可なり。何ぞ必ずしも医とならんと。是に於て大に悟り、乃ち請ひて曰く、僕願くは学ばん敢えてその方を請ふと、余曰く尔が家は所謂骨董舖なり。尔多く古書を蕃聚す、その間に坐臥し、且つ商ひ且つ学べば渴と窮と一も患なる所なし。(中略) 果能く是の如くば尔の立つ所以て二生を壓するに足らん」(三三六、安4・8)と。

三人の不良少年の現実の所からの学び方を教えた。他の門人たちならばここから着実な学習を始めて松陰の信頼と期待を勝ち得ていったと考えられる。同年九月十三日、すなわち市之進と約した一か月あとのことである。

「示三生

秀実爾三生を託する甚だ厚し。吾は三生の気を挫き兼ねて秀実の志を傷つけんことを恐れ、是を以て事々に寛假し、未だ曾つて呵責を加へず。何ぞ凶らん寛假が縦を致し、三生をして勤告すること初に變らしめんとは。是れ吾が過なり。吾今より轍を改め、束湿をもて相待せんとす。堪えざれば則ち去れ。吾秀実に報ゆること是の如くして足らん、丁巳九月十三日、書して以て三生に与ふ」(三三四)と。

このあと音三郎が松陰の再入獄をその途次に母と共に見送ったという一事だけで三名は消えている。先の岡田耕作の場合もこの三人の場合も本人に自発性がなければ、松陰がいかに信頼や期待を持ったとしても門下生が大成できないということを物語っているということができよう。